

都市計画家

Planners

2018 AUTUMN

89



特集

全国まちづくり会議 2018 in 福岡

人と時のつながりが紡ぐ
[まちの個性]

—関係が生まれる時空のデザイン—

全国まちづくり会議2018 in 福岡を終えて

■はじめに

全国まちづくり会議は、2015年東京、2016年高岡、2017年横浜での開催を経て、福岡で第14回を開催することになりました。横浜でまちづくりの新たな方向をうちだし成功を納めてから、福岡支部の有志各位とともに九州の各機関と個人に対する協力依頼を開始しました。年末の準備会を経て、2018年1月から実行委員会とその準備会を月例で開催しました。

■まちの個性

まちづくりで大切にしたいことは、人のつながり（交流、交易、ネットワーク、ソーシャルキャピタル、信頼）と時のつながり（歴史の継承、場の記憶、場所性の解説、時間とともに育つ環境）、そして、過去、現在、未来にわたって人と時のつながりが紡ぐ「まちの個性」です。西日本に位置する福岡はアジア諸国にも近く、古来より博多として海外との交流・交易が盛んであり、時間をかけて都市圏が形成され、全国5番目の市人口157万人、都市圏人口250万人を擁する拠点都市に成長しています。九州、福岡における「まちの個性」を題材として、今回の会議のフォーラムの各テーマに展開できないかと考えました。福田忠昭氏発信のこの提案は実行委員の共感を得て、これをもとにフォーラムのテーマを深堀りすることになりました。

■九州大学箱崎

福岡市の発展の要因の一つには、都市圏に立地している国公私大学の存在があげられています。若者が集まり多くの人材を輩出し続けています。私の所属する九州大学は、これまで百年間活動してきた箱崎から伊都への移転を2018年前期に終えることになりました。産官学のメンバーによる箱崎キャンパス跡地利用協議会で2018年7月にランドデザインを策定し、これに基づいて跡地利用計画が着々と進行中です。移転引っ越しの最中ですが、九州大学箱崎キャンパスとして最後となるこの時期に開催することを、牧敦司事務局長の発案によって早い時期に決定し、移転による閉鎖直前の2018年9月8日（土）および9日（日）を期日に設定し、準備を進めました。

■これからのまちづくり

福岡県糸島市在住であり、全国・海外で活躍しているアーティスト藤浩志氏をお招きし、地域の人やモノ、場をつなぐ様々な「活動」、さらにその活動が継承され

るための「仕組み」について、ご自身のアート活動を通じてご紹介いただいたうえで、これからのまちづくりのあり方に関する問題を提起していただきました。パネルディスカッションでは、藤氏に加え、東北で東日本大震災の復興などに携わられている臂徹氏と、地元、福岡地域戦略推進協議会より榎本拓真氏が加わり、今後大きく変わっていく人口構成や生活スタイルにどのように対応していくのかを熱く語っていただきました。

■まちの個性の紡ぎ方

「まちの個性」をどのように紡いできたのか、これからどのように紡いでいくのか。人口減少時代を迎えた日本では、自身の発展を展望しつつも縮退を見据えたデザインが問われます。点在する歴史文化遺産をまちづくりに活かす（箕浦）、福岡の都市デザインをレビューする（尾辻）、エリマネ組織のネットワークを考える（長谷川）、まちビトトーク-福岡の地域性が育む「まちビト」とは-（三谷）、観光からはじまる景観づくり（福田）などのフォーラムにおいて、様々な視点から「まちの個性」を引き出し伸ばしていく方策を議論しました。

■QOLと持続性

また、「まちの個性」を伸ばすためには、生活の質QOLとその持続性が問われます。「暮らしかた」から考える地域の再生（黒瀬）、人が集まる場のつくり方（渡会）、花と緑のまちづくり推進フォーラム（井上）、日韓まちづくりフォーラム（小泉）、都市農地を活かすまちづくりの展望（小谷）、ejob事業はこれからの都市計画に貢献するか？（北本）、プランナーの職能とAI（守）などのフォーラムにおいて、様々な視点から都市生活を豊かにしていくための仕組みや道具立てを議論しました。

■強靱性を問う

さらに、近年の様々な災害発生を受け、都市の強靱性が問われています。熊本地震と九州北部豪雨から考える地区レベルの復興（柴田）、交通とまちづくり-福岡市の交通と都市の姿130年-（中村）などのフォーラムにおいて、「まちの個性」をささえる強靱なインフラの構築とその持続可能性を議論しました。

■地域を読み解く面白さ

森田一義氏を特別表彰することについては、理事会でも早くから話題になっていました。近年、NHKの番組を通じて、都市、地域を読み解くことの面白さを広く一般に知らしめる活動をしておられ、各地の地形や

歴史、ものがたりの重要性を説き、それまで知られていなかったことや、忘れられていたことを、専門家を交えてお茶の間にわかりやすく説明し、全国各地の都市の理解を深めることに貢献しておられます。福岡出身であり、本年の表彰対象として最もふさわしいということから、本会会長と福岡支部長より特別賞を贈ることになりました。森田氏は受賞について快諾いただきましたが、日程がどうしても合わなかったことから、西麻布でビデオレターを撮影し、会場に持ち込んで放映しました。

■そして伊都へ

翌日のエクスカッションは好天に恵まれました。山王孝尚助教、施設部の安部貴之氏とともに、伊都キャンパスのビッグオレンジにお集まりいただいた皆様をご案内し、キャンパスツアーを実施して九州大学を核として整備中の学術研究都市の将来を展望しました。

■おわりに

会議後のミーティングでは、実行委員から以下のような感想を伺いました。旧工学部本館大講堂は独特の雰囲気があり良かった／山辺。東北大震災後の経験を直接聞き意見交換できたことは収穫だった／柴田。2日間幅の広い話を聞くことができた／片田江。テーマも会場も広いのが印象的だった／中村。現場の人の声を直接聞く良い機会になった／柿原。引き続きこの繋がりを大事にしたい／今長谷。防災を課題のひとつとして重視したい／中嶋。より早く告知するとさらに集められる／大西。フォーラムの時間をもう少しほしい／坂東。フォーラムが多く選択するのに悩んだ／西周。事前打合せを念入りにできるとより完璧だった／福井。立場の違いを鮮明にしたディスカッションができた／福田。今後の活動の参考になった／大久保。まちづくりをテーマにさらに絞り込んでもよい／尾辻。これまでの都市づくりを理解できたことが収穫だった／永野。まちづくりのソフト面の現場の話を多く聞いた／三角。歴史的な施設でフォーラムをできたことは良かった／木村。多くの皆様のご協力に感謝したい／牧。

実行面でいくつかの課題が残りましたが、各フォーラムの充実度については参加者の皆様から評価いただけたのではないかと思います。来年の会議に向けて持ち越したテーマもあり、今後のさらなる展開をご期待申し上げます。

■謝辞

国土交通省九州地方整備局、福岡県、福岡市、西日本新聞社には、後援いただき関係機関へこの会議開催を広報していただきました。西日本新聞には2日間にわたって、会議の様態を報道していただきました。また、多くの企業、団体には、この会議と日本都市計画家協会への寄付・協賛をいただきました。厚くお礼を申し上げます。小林英嗣会長をはじめ理事会の皆様には、終始適切な助言をいただき、牧敦司福岡支部事務局長をはじめとする実行委員、特別講演とフォーラムの登壇者には、テーマ設定の段階から会議の運営まで大変お世話になりました。さらに、九州大学の久保千春総長、安浦寛人理事副学長にはこの会議の箱崎開催に賛同いただき、大学事務局とともに運営に関する数多くの便宜を図っていただきました。中園政直副市長をはじめとする福岡市役所の皆様には、本学大学院生とともに実行委員会会場のセットから当日の隅々に至る実施事項までご配慮いただきました。最後に、志賀勉准教授(九州大学)、永野真係長(福岡市)、趙世晨教授(九州大学)には、懇親会から3次会に至る会議後の重要な場を設定していただき有意義な意見交換に貢献していただきました。重ねて感謝申し上げます。

撮影：徐非凡



Planners 89 CONTENTS

人と時のつながりが紡ぐ【まちの個性】

—関係が生まれる時空のデザイン—

- 2 総括……………坂井 猛
- 4 全国まちづくり会議2018 in 福岡を終えて……………大西 信也
- 5 イベント概要
- 6 基調講演・パネルディスカッション……………福田 忠昭
- 8 福岡の都市デザインをレビューする……………尾辻 信宣
- 10 点在する歴史文化遺産をまちづくりに活かす……………箕浦 永子
- 12 交通とまちづくり—福岡市の交通と都市の姿 130年……………中村 宏
- 13 「暮らしかた」から考える地域の再生……………黒瀬 武史
- 14 日韓まちづくりフォーラム—公共性と事業性の間……………鄭 一止
- 15 熊本地震と九州北部豪雨から考える地区レベルの復興……………柴田 祐
- 16 市民力を引き出すしくみ—観光からはじまる景観づくり……………福田 忠昭
- 17 新しい大学像を展望する—伊都キャンパスツアー……………坂井 猛
- 18 ポスターセッション+プレゼンタイム……………田嶋 麻美、手島 朋之
- 19 人が集まる場のつくり方……………片田江 由佳
- 20 まちビトトーク—福岡の地域性が育む「まちビト」とは……………三谷 蘭子
- 21 ejob事業はこれからの都市計画に貢献するか?……………大口 寛貴、北本 美江子
- 22 エリマネ組織のネットワークを考える……………長谷川 隆三
- 23 「花と緑のまちづくりフォーラム2018 in 福岡」報告……………井上 忠佳
- 24 生産緑地研究会—都市農地を活かすまちづくりの展望……………小谷 俊哉
- 25 プランナーの職能とAI……………守 茂昭
- 26 全まち福岡の成果と意義……………小林 英嗣
- 27 全国まちづくり会議2019のご案内……………志村 秀明

裏表紙 2018年6月1日～2018年10月31日 協会の動向

全国まちづくり会議2018 in 福岡を終えて

福岡市住宅都市局都市計画課長 大西 信也

●福岡市での開催について

このたび、全国まちづくり会議2018を福岡市で開催していただき誠にありがとうございました。

福岡市は大陸に面するという地理的特性を持ち、2000年にわたる世界との交流のなかで歴史や文化が育まれた地です。人との触れ合いを大事にする気質や、明太子やもつ鍋などユニークな食文化も有しております。この福岡市で、『人と時のつながりが紡ぐまちの個性』という、まさに本市にピッタリなテーマで、全国のまちづくり活動を行っている方々が集うというお話をいただき、本市も微力ながらお手伝いをさせていただきました。

●福岡市のまちづくり

福岡市では、平成24年度に策定した総合計画で、「都市の成長と生活の質の向上の好循環」を基本戦略に掲げまちづくりを進めています。企業立地や、交流人口の増加で得た税収増などの果実を、福祉や子育て、防災などにまわしていくものです。

その成果は、人口や入込観光客数の増加、政令市中第1位の国際会議の開催、全国第1位のクルーズ船寄港などに現れてきています。

また、市民への意識調査において、福岡市を「住みやすい」とお答えいただいた方が過去最高の97.1%となるなど、市民の皆様からも高い評価をいただいています。

一方で、都市の成長に伴う需要の増加に対し、ホテル、オフィス、MICE（※）、クルーズなど、都市の供給力が不足してきています。

そこで、航空法の高さ制限などの規制緩和により民間活力を最大限に引き出す『天神ビッグバン』や、増大するMICEやクルーズの供給力不足に対応するため、コンセッション方式を活用した『ウォーターフロントネクスト』といったプロジェクトを進めているところです。

福岡市は、今後も、こうした強みを生かしながら、アジアの中で存在感のある都市づくりを進め、人と環境と都市活力の調和がとれたアジアのリーダー都市の実現を目指していきたいと考えています。

●九州大学箱崎キャンパス跡地のまちづくり

このたびの会議は、九州大学箱崎キャンパスで開催されました。九州大学は本市西区の伊都キャンパスへの統合移転事業を進めてきており、本原稿を執筆している平成30年9月29日に伊都キャンパスの完成記念式典が行われました。

今回の会議にご参加の皆様には、まさに、これから箱崎キャンパス跡地のまちづくりが本格始動していく瞬間に立ち合っただきました。

跡地の活用については、交通利便性がとても高く、都心部に近いおよそ50ヘクタールの土地が一体的に活用できるというポテンシャルを最大限に生かして、都市基盤の整備を進めるとともに、最先端の技術革新による快適で質の高いライフスタイルと都市空間を創出する『FUKUOKA Smart EAST』の実現に取り組むこととしています。

九州大学などの関係者の皆様と連携し、世界に誇れるまちづくりを目指していますが、会議にご参加の皆様におかれましても全国からご注目いただければ幸いです。

●全国まちづくり会議2018 in 福岡を終えて

このたびの会議におきまして、福岡市は、「花と緑のまちづくり推進フォーラム」や、「エリマネ組織のネットワークを考える」、「ejob事業はこれからの都市計画に貢献するのか？」のセッションに担当職員が参加させていただきました。また、福岡の都市デザインや交通などをテーマとしたセッションも開催されました。全国でまちづくり活動を行っている方々との意見交換は大変有意義であり、いただいたアドバイスを、全国各地からの情報提供などは、今後のまちづくりに活かしていきたいと考えております。

最後になりますが、人口減少や超高齢社会、災害などの諸課題に対し、今後、まちづくりを担う皆様と行政との連携がますます重要となっており、引き続きお力添えをいただければと思います。

※MICE：国際会議や展示会等多くの集客が込まれるビジネスイベントの総称

人と時のつながりが紡ぐ [まちの個性]

ー関係が生まれる時空のデザイナーー

2018年9月8日(土)、9日(日)、九州大学箱崎キャンパスにて開催された全国まちづくり会議の概要は以下のとおりです。

主催：認定特定非営利法人 日本都市計画家協会

共催：九州大学(伊都キャンパス完成記念行事)

後援：国土交通省九州地方整備局、福岡県、福岡市、西日本新聞社

協賛：九州電力(株)、西部ガス(株)、積水ハウス(株)福岡マンション事業部、三菱地所(株)、(株)URリネージュ、九州旅客鉄道(株)、西日本鉄道(株)、(株)日建設計、(株)日本設計、(株)アルテップ、(株)エックス都市研究所、パシフィックコンサルタンツ(株)、(株)よかネット、(株)安井建築設計事務所、(株)久米設計、(株)梓設計、(株)醇建築まちづくり研究所、(株)福山コンサルタント、(株)大林組、鹿島建設(株)、清水建設(株)、(株)竹中工務店

パネル展示出展団体

18ページ参照

タイムテーブル

9 8 SAT	21世紀プラザ			旧工学部本館			本部第1庁舎
	1階/多目的室	2階/講義室A	2階/講義室B	1階/大講義室	3階/10番講義室	3階/大会議室	2階/第1会議室
13:00		0	0	開会式/特別表彰			
14:00		パネル展示	パネル展示	基調講演 パネルディスカッション			
15:00							
16:00		プレゼン タイム	プレゼン タイム	1 点在する 歴史文化遺産を まちづくりに活かす	2 ejob事業は これからの 都市計画に 貢献するのか?	3 日韓まちづくり フォーラム	4 「暮らしかた」から 考える地域の再生
17:00							
18:00							
19:00	交流会						
20:00							
9 9 SUN	21世紀プラザ			旧工学部本館			本部第1庁舎
	1階/多目的室	2階/講義室A	2階/講義室B	1階/大講義室	3階/10番講義室	3階/大会議室	2階/第1会議室
10:00	9 まちビトトーク	0	0	5 福岡の 都市デザインを レビューする	6 都市農地を 活かすまちづくりの 展望	7 観光から はじまる 景観づくり	8 花と緑の まちづくり推進 フォーラム
11:00		パネル展示	パネル展示				
12:00							
13:00							
14:00	13 熊本地震と 九州北部豪雨から 考える地区レベルの復興			10 交通と まちづくり	11 エリマネ組織の ネットワークを 考える	12 人が集まる場所の つくり方	
15:00					14 プランナーの 職能とAI		
16:00							
17:15				閉会式			
30							
9 10 MON	エクスカージョン						
	9:30~11:30 新しい大学像を展望するー九州大学伊都キャンパスツアー(現地集合です。)						

基調講演・パネルディスカッション

人と時のつながりが紡ぐ「まちの個性」

基調講演

藤 浩志 (アーティスト/秋田公立美術大)



●**関係をつくる存在すること**

「このまち関係ない所ばかり」。2004年、福岡市の市民研究員制度に参加して、百道浜というまちの検証を行ったが、そこの子どもが発した言葉。近くに海岸などがあるが子どもが行けるのはコンビニだけ。この言葉は衝撃的で、まちと関係をどう作っていけばいいかということを考えるきっかけになった。また、その頃、インドネシアの津波で生き残った方が、家族や仕事場全てを流され、自分は存在しているが生きていく気がしないと言う。人間は関係の中で存在して生きている。その後、瀬戸内芸術祭で「藤島八十郎」という架空の人物をつくるプロジェクトにも取り組んだ。関係がない所に関係をつくるということが僕の活動の中心となっている。

●**ヤセ犬の視点**

都市計画事務所に勤めていた時に、俯瞰して計画図を描いていくような仕事をしていたが、常に下からの視点が重要だと考えている。これはパプアニューギニアで出会った「ヤセ犬」の視点で、弱者の視点。ヤセ犬のようにウロウロしながら、いろいろな角度から、人に出会いながら活動をつくっていくことを大切にしている。

●**イメージを立ち上げる前の「モヤモヤ」**

今僕らが見ている風景や商品は、誰かが計画を立

てて予算化して、開発・流通して届いている。何か問題があって計画することになるが、この時イメージを立ち上げることが非常に重要。これまでは成功事例があったが、現在はそれがなくなり、このイメージをどこから持ってくるかというのが大切。このイメージの前にあるものを僕は「モヤモヤ」と呼んでいる。現況に対する違和感のようなもので、一番の宝物と考えている。例えば、ペットボトルで水を売り始めた人も最初はそういう感じだったのでは。

●**「未来は作れない」、「過去は作れる」**

現在の風景や商品には過去があり、計画があって生まれてきている。僕らは未来をつくるために計画を立てているような気がするが、実は「未来はつくれない」。今までやってきたことを語ることはできるので「過去はつくれる」。ある哲学者が、時間の流れは「後ろ向きに歩いているようなもの」といったが、明日は後ろ側なので見えず、自分の目の前には過去が広がっている。見えない未来に向けて、後ろ向きに一步踏み出すためにどうするかが計画を立てるということだ。

●**活動を生み出す仕組み**

僕自身は、日常を超えるようなインパクトのある活動に惹かれてきた。日常の世界から別の世界に引き上げていくような仕組みで、祭りや催事などが、人の活動を連鎖させ、生み出していくと思ってシステムをつくったり、場をつくったりした。「かえっこ」、「灯明」というプロジェクトがあるが、最近、「部活動」をつくる活動に取り組んでいる。仙台メディアテークで行った「ワケあり雑がみ部」という活動。部員が、自由に材料を使って一生懸命に何か作っている。この活動は、興味関心を中心に据えて活動をつくっていくことの試みだった。また、「イザ！カエルキャラバン」という防災教育プログラムをつくったNPO法人プラスアーツのウェブサイトで「プラスアーツ・メソッド」というのを紹介している。これが「活動の作り方」みたいなもので、風、水、土の考え方で整理している。もう一つ「不完全プランニング」といっているが、不完全な状態にする中でいろいろな人が関わりながら活動をつくっていくという考え方を示している。

●新しい活動や価値を生み出すために

僕は新しい活動や価値を生み出すことにしか興味が無い。近代美術館には過去に価値をつくった作品があるが、現代美術館にはこれからの価値を示すものが置いてある。こういう活動を進める時に一番邪魔になるのが、過去の価値・常識でつくってきたもので、重しになって新しい活動を阻害している。立場主義から逃れ、興味関心を育むことが重要。現在の大学での仕事でも、NPO法人をつくってそのような活動を始めている。

パネルディスカッション

パネラー：藤 浩志

臂 徹 (日本都市計画家協会理事、(株)キャッセン大船渡)

榎本 拓真 (福岡地域戦略推進協議会)

進行：福田 忠昭 (LOCAL&DESIGN (株))

●多様なセクターとの関係性の築き方

榎本：誰も使ったことがない技術と未来の社会課題を解決するために実証実験などを行って、つないでいく取り組みと産学官民のお互いが理解できるように翻訳するような関係づくりだと思う。

臂：創造性やクリエイティビティをいかに発揮するか。地域に合わせるのも大事だが、自分たちが地域にその価値を伝えていくことも大事。

藤：地域の人は抑圧されている。それを解放してあげることが必要で、そこをアーティストなどが担っているのでは。いろいろな場が動き出すためには『態度』が必要だと思っていて、空間だけではだめ。そこに材料や許される環境、そして楽しく何かをやっている人がいると、その『態度』に引きずられて動き出す。逆に良くないのは、上から目線の人や「教えてやろう」という『態度』があると、みんな委縮してしまう。子どものワークショップでもすごく危ないのは「上手いね」という言葉で、上手く作ったら褒められるというのは間違っている。

●場のデザインの仕方について

臂：計画段階で動線やたまり場などを考えても、人がプラン通りに動くことはない。しかし、想定を裏切

るような使い方をする人が出てくると、周りも使っていると思う。そういう動きのある場をいかにつくるかが重要。

榎本：天神は都市開発プロジェクトが目白押しだが、「更地になってバリエードができて数年後竣工」では、関わる隙間がない。エリアマネジメントは本来、そのようなところに関わりをつくらないといけないと思う。

藤：東北へ行って「閉じる」ことのすばらしさを感じた。「閉じる」ということは悪いことのようにも言われたりするが、十和田市現代美術館では、冬場はお客さんが少ないので長期間、閉じて設営やコンテンツの制作ができる。先日、八戸の美術館のコンペがあったが、そこでは閉じている美術館とオープンスペースに加え、中間領域をつくるのが条件になっていた。この中間の領域をどうつくっていくかということも重要。

●まちづくりは「希望」の時間をつくること

藤：僕らはまちやモノをつくっているように思うが、実は時間をつくっている。震災復興の現場には絶望的な時間、絶望的な地域がある。そこに「期待の時間」や「希望の時間」をつくりだすことがまちづくりだろう。何かをつくろうとすることは少なくとも何かの「完成」に向かうことで「期待」や「希望」が生まれる。プラモデルも、つくっている時が一番楽しい。できたものを与えられてもおもしろくないし、本当はつくる時間が楽しいので、それを奪ってはいけない。それをどうやって共有して楽しんでいくか。まちづくりは、「希望」の時間をつくるために、いろいろなものや活動をつくっていくことだ。



これからの福岡は、都市の新陳代謝をデザインする

●趣旨

「最強の地方都市」と全国的に注目され『天神ビッグバン』として本格的な都市再開発が始動する今、福岡の都市デザインをレビューしようと企画した。前半は4名の実務家により、それぞれの福岡の都市デザインを紹介していただき、後半にPDで議論した。梅本氏には1970年から2000年代初頭に手がけた都市デザイン、川端氏には福岡を概括し天神地区を中心に現在進行形の都市デザイン、柴田氏には代表作の警固公園を中心としたランドスケープデザイン、榎本氏にはこれからの福岡を見据えての「しくみ」のデザインについて。司会進行は、牧敦司（日本都市計画協会理事・福岡支部事務局長、醇建築まちづくり研究所）が務めた。

●それぞれの福岡の都市デザイン

梅本 政紀 うめもと まさとし

元・環境開発研究所 1940年福岡県小倉市生まれ。1962年九州大学工学部建築学科卒業、竹中工務店、環境開発研究所常務取締役顧問、九州大学工学部建築学科非常勤講師、福岡県まちづくりアドバイザー、日本都市計画学会評議員等を歴任。日本都市計画学会功績賞、再開発コーディネーター協会高山賞、功労賞、福岡市、佐世保市都市景観賞等を受賞。



昭和40年ごろの福岡市の都市計画では将来像を北九州市に続く『工業都市』としていた。そこから九州一の商都へ転換・発展していく中で、私は九大生として、コンサルタントとして様々なプロジェクトに関わってきた。学生の時には都市計画グループを結成し人工地盤を多用した大胆な提案を行った。その後、コンサルタントになり川端商店街再開発計画（川端商店街）、歩行者・自転車交通計画（福岡市）、天神東西軸モール（明治通り）の空間設計などを手がけた。その中で天神東西軸モール・中洲Tモールは1987年に「日本の道100選」に選ばれたが、その後何度か改修があり劣化が進んだ。デザインの質を保つのは本当に難しいと感じさせられた。福博プロムナード沿いにある福博出合い橋・アクロス福岡・天神中央公園などの主要な施設は、地元の発展協議会の努力があり実現されたことは特筆すべき。まちづくりには地元の自助努力が欠かせない。1988年には福岡都心構想をまとめ、天神地区では人間的な都心空間の形成をテーマにしたプロジェクト、ウォータフロント地区では海に開かれた新都心を提案した。平成に入り、

都心部の歩行者・自転車ネットワーク構想をまとめ、地上部とともに地下ネットワークも提案し、それが現在も継承され拡張し続けている。その他に、今のマリンメッセや国際会議場を含む中央埠頭の土地利用計画、渡辺通春吉地区のコミュニティに配慮した構想などを手がけた。

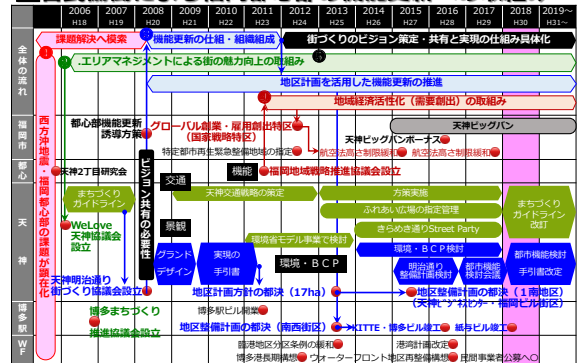
川端 互 かわばた わたる

(株)日建設計 理事 九州代表補佐 1957年福岡県生まれ。九州大大学院修了。建設会社や都市開発コンサルタント勤務を経て2002年日建設計に入社。2007年から九州副代表、2018年より現職。「天神明治通り街づくり協議会」アドバイザーのほか、広島大学客員教授なども務める。再開発プランナー、1級建築士。専門は都市計画・都市開発のコンサルティング。



都市デザインは単なる空間だけでなくアクティビティや「心地よい・楽しい」など様々な軸で評価されるべき。福岡は1960年代以降から都市圏の中心となり、1980年には北九州市を人口で追い抜き、九州の中心都市となる。バブル期に都心部で大規模なプロジェクトに手をつけなかったことでバブル崩壊後も大きな後遺症もなく、その後も成長を続ける。しかしながら2000年代に入って西方沖地震もあり都心部の建物の機能更新の必要性が顕在化し、日本が2050年の超高齢化社会（全国の人口2500万人（1/5）減。3人に1人が高齢者）へ向かう中で国際競争力強化が急務となった。こうした課題認識の下、2006年のWeLove天神協議会設立を契機に官民協働による様々な取り組みが行われている（図参照）。容積割

〇官民協働による福岡都心部の機能更新への取組み



増をインセンティブとする福岡市による都心部機能更新誘導方策の策定に呼応する形で、天神・博多駅地区においてエリア毎の地権者等の組織化が進んだ。地権者等が協働して、街づくりビジョンや交通戦略・歩行者空間形成方針等の施策を共有しつつ、エリア

尾辻 信宣
合同会社G計画デザイン研究所

マネジメントや建替えによる機能更新を行う取組みが現在進行中である。この中で魅力的な街並みづくりやパブリック空間の価値向上、歩行者ネットワーク強化などの都市デザインへの取組みが行われている。

柴田 久 しばた ひさし
福岡大学工学部社会デザイン工学科 教授 1970年福岡県生まれ。東京工業大学大学院情報環境学専攻博士課程修了、博士(工学)。筑波大学講師、カリフォルニア大学バークレイ校客員研究員等を経て2014年より現職。専門は景観設計、公共施設のデザイン、まちづくり。2014・2011グッドデザイン賞、土木学会デザイン賞最優秀賞、国土交通省都市景観大賞優秀賞など受賞。



【警固公園再整備】では、築山での性犯罪事件、ハント族の横行、落書きなどが多発していた警固公園の再整備案について、警察からの相談を機に、設計コンセプトの考案から従事。市からは当初「とにかく見通しを良くして死角を無くして欲しい」と依頼された。だが防犯だけでなく、天神の真ん中にあるポテンシャルを考えると魅力的な空間にする必要があると感じ、日常的な動線を確保しつつ、見る見られる関係をつくりながら、各所が魅力的に見えるようなデザインを試みた。その結果、新たな動線やオープンな空間を創出し、また隣接するソラリアプラザ公園側壁面がガラスに改修されるなど、魅力的な都市デザインとなった。他にも円形広場での賑わいやアクティビティの創出、公園利用客の増加など、防犯だけでなく様々な魅力を創出した。【那珂川護岸修景整備】では、県の委員会の委員長を務め、「水辺都市福岡における風景の礎になる那珂川を目指して」をコンセプトに昔の間知石積み護岸の風景の再生に取り組んだ。【水上公園再整備&天神中央公園西中洲エリア再整備】では、PFI事業者選定の審査委員長を務め、今後、魅力的な水辺空間が創出されると期待している。

榎本 拓真 えのもと たくま
Local Knowledge Platform、福岡地域戦略推進協議会 1982年新潟県魚沼市生まれ。博士(工学)。横浜国立大学大学院修了後、九州大学大学院学術研究員等を経て、現職。交通戦略策定のコンサルティングやエリアマネジメント組織の運営、各種プロジェクト評価、国連ハビタット(国際連合人間居住計画)コンサルタント等に従事。専門は都市交通計画、都市・地域計画、都市政策、交通政策。



私は2010年福岡に来て日が浅いので、自分の経験よりこれからのことを中心に話をしたい。不確実な将来に対して、今どのような行動をすべきか? WeLove天神協議会のガイドライン改定の中で議論

を始めている。これまでの事前確定的な目標設定・事後評価のモデルに限界を感じている。今の社会で本当にビジョンや戦略が必要なのか? 必要ならどういようなビジョンや戦略であるべきか? 長期にわたる大型プロジェクトでは開発主体間の合意形成がとて難しい。変化のスピードが激しい現代社会において、どんなビジョンを描いても数年後には陳腐化してしまう可能性があり、予測に基づく作りこんだ目標像は要らないのではないか。それよりも機動力をもって、スモールステップで実証実験を繰り返しながらアジャイルに課題解決していく方法、動的に進化していく都市デザインとそれを支える戦略が求められていると思う。

●パネルディスカッション「福岡の都市は魅力的か?」

梅本:かつて工業都市を目指していた福岡市はアジアに開く商都へ大きく転換し成功した。メタボリズム(都市は新陳代謝していく)そのものを福岡は体現している。都市デザインには、市民が中心のまちづくり、歴史の積み重ね、シンプルなコンセプト、情熱をもって取り組むキーマン、全体を見据えた構想力が大切だ。

川端:変化していくビジョン、様々な主体や官民同士の共有・協働の仕組みをうまく築けるかが課題。多難な時代・正解の無い社会で、共感できるデザインの共有、デザインの質を保つことは大切だ。

柴田:公共空間の整備には明確に事業目的が設定されているがその目的以外にも重要な使命が付随していて、それを読み解き、空間化することがデザイナーの役割。都市には押さえるべき大切なツボがあり、それをちゃんと都市計画家やアーバンデザイナー、ランドスケープアーキテクトといった専門家は考えるべき。

榎本:天神や博多などの都心の将来を考える上で郊外との関係、歴史の積み重ね、価値観の共有が重要だ。

●おわりに

時代のホットスポットと言える福岡で4名の専門家を迎え「福岡の都市デザイン」をレビューし、これからの福岡の都市デザインの向かうべき方向や課題の一端に触れることができた。僅かな時間で、熱い発言・論説をいただいた講師には感謝したい。この議論が、これからの福岡の都市デザインの一助となることを期待したい。

点在する歴史文化遺産をまちづくりに活かす

●開催趣旨

歴史文化遺産が点在して残っているマチは全国に多くある。例えば箱崎は宮崎宮を擁し社家町・宿場町・漁師町が織りなす歴史的なマチであり、その遺産は点在して残る状況である。本フォーラムでは、歴史文化遺産が重要伝統的建造物群保存地区のように連続せず点在して残っているマチに眼差しを向け、先進的な事例に学びながら歴史文化遺産の保存と活用のあり方そして歴史まちづくりへの展開方法について考える。

1. 特別講演

田村邦明(宮崎宮権宮司)「宮崎宮の社領とマチの千年」

宮崎宮は延長元年(923)に箱崎に創建されたと伝えられ、千年余の歴史を有する。中世に港町として発展した博多の人々からも崇敬を受け、博多部にある御供所町は宮崎宮の供物を用意する町であったことに由来するという。その社領は、石堂川(現:御笠川)を西端に、現在という箱崎・馬出地区を包含する広大な領域で、秋に行われる放生会御神幸の巡行路から、かつての社領範囲を窺い知ることができる。



宮崎宮の参道をもとに直線上に見ていくと、北西方向は志賀島、壱岐、対馬、朝鮮(合浦)に向かい、南東方向は三郡山、大宰府に向かう。この軸線は宮崎宮を時計の針の中心と見立てると12時-6時(北西-南東)にあたり、さらに垂直方向の3時-9時の方向(北東-南西)を見ていくと、北東方向には宮地嶽神社、宗像大社、南西方向に住吉神社が位置する。宮崎宮は北部九州においてこのような位置に立地している。

宮崎宮の楼門の前に植わる宮松は御神木であり、この位置から3時-9時の方向に「箱崎三山」と呼ばれる宇佐殿米山弁財天、真砂山跡碑、道具山神社が位置する。米山はお米を積んだ山であり農業に関連する。真砂山は船の安定を図る砂の錘を盛った山で漁業に関連する。そして、道具山は宮崎宮で用いられる道具の職人に関わる。これらは箱崎・馬出のマチにおける複合的居住の有り様にも繋がる。近世に

は、唐津街道沿いに宿場町・商人のマチが形成され、博多湾側の網屋町あたりは漁村、宮崎宮の北東は田畑が広がる農村であった。また、道具山のある馬出は曲物の一大生産地であり職人のマチであった。このように宮崎宮と箱崎界隈のマチは、千年余りを共存してきたのである。

最後に、神社参拝の作法を丁寧に説かれ、来場者は改めてひとつひとつの作法を確認することができた。

2. パネルディスカッション

「点在する歴史文化遺産をまちづくりに活かす」

話題提供1: 田上稔(福岡県教育庁文化財保護課)
「文化財保護の動向__まちづくりを中心に」

福岡県の文化財保護行政においては、指定・登録を着実に進めており、平成20年以降をみても重要文化財(建造物)2件、名勝2件、重要文化的景観1件、史跡10件、重要伝統的建造物群保存地区2地区、登録有形文化財91件の指定・登録を進めてきた。一方で、文化財保護行政で推進されているのは、活用、まちづくり、観光、法改正であり、歴史まちづくり法によるものとして、太宰府市、添田町、宗像市の3市町の歴史的風致維持向上計画が認定された。また、ユネスコ世界遺産に「明治日本の産業革命遺産」「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群が登録され、日本遺産に「古代日本の「西の都」」「関門「ノスタルジック」海峡」が認定されている。活動主体は、住民が設立した保存会や官民協働によるものが活発化しており、地域住民自ら考えてイベントや修理を行うなど、文化財保護の担い手は地域住民に移りつつある。

話題提供2: 城戸康利(太宰府市教育委員会文化財課)
「文化遺産からはじめるまちづくり__地域の文化財担当者として」

従来の文化財保護は、歴史上・芸術上・学術上・鑑賞上に価値の高いものを指定・登録してきた。しかし、このような対象だけではなく、「地域の生活の中で生まれ育まれてきたはずの歴史文化」も「日々の生活を豊かにするもの」「未来の世界を豊かにするもの」として保護していきたいと考え、太宰府市民遺産を始めた。太宰府市の文化遺産に対する考え方は、学術的価値が明らかとなった文化遺産を文化財として保護することを目的とした「文化財として保護す

九州大学 箕浦 永子

る」に加えて、文化遺産を物語とともに太宰府市民遺産として育成することを目的とする「市民遺産として育成する」、市民一人ひとりが大切に思う文化遺産を市民とともに見守ることを目的とする「文化遺産を見守る」の3つを基本方針としている。平成22年(2010)には「太宰府の景観と市民遺産を守り育てる条例」を制定し、市民から申請された文化遺産を景観・市民遺産会議で認定し登録する仕組みをつくった。現在、13の市民遺産を認定・登録しており、行政は市民の保存活動を支援している。

話題提供3：北島力(NPOまちづくりネット八女)
「八女福島のみちづくり__25年の歩みで見えてきたもの」

八女福島のみちづくりは、平成3年(1991)に超大型台風が襲来し町家が甚大な被害を受けたことにより、歴史的遺産である町家を守る意識が高まり、まちづくり団体を設立したことに始まる。平成14年(2002)には国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。その前後に様々なまちづくり団体が発足し、保存のみならず再生や活用の仕組みづくりを構築してきた。伝統家屋等の修理・修景事業は、街なみ環境整備事業で42棟、伝建事業で95棟の計137棟の実績があり、今後修理が必要な伝統家屋は約120棟が控えている。これまでの25年の歩みから見えてきたまちづくりの発展方向を以下のように考えている。

- ・運動体としての組織が重要である
- ・歴史文化遺産のみちづくりは、まず基礎調査を
- ・目標、戦略を明確にして、その官民の共有が必要
- ・住民団体と行政の協働のみちづくり
- ・行政の役割として、持続する制度導入をする
- ・まちづくりを持続させる、走りながら課題を克服する

話題提供4：大塚政徳(まちなみネットワーク福岡)
「身近な地域資源を活かしたまちづくり__箱崎宿の宝を福岡市民の宝に！」

主にまちづくり活動を行ってきた姪浜は、箱崎と同じく唐津街道沿いの宿場町であり、周辺に漁村や農村が隣接していたという特徴も箱崎とよく似ている。また、箱崎と同様に歴史文化遺産も点在している状況にあるが、地域の魅力の再認識と地域内外への発信を目標として、これまでにまち歩きマップの発

行、景観歴史発掘ガイドツアー、歴史的建造物でのコンサートや講演会、まちなみ展示会、まちづくり活動拠点の開設・運営、まちづくり瓦版の発行などの活動を行ってきた。次に、地域協働のみちづくり計画を策定し、景観まちづくりの実践として、町家再生の実践、旧町名表示板の設置、「姪浜ブランド」「姪浜町家」の認定、景観づくり普及活動などを行った。このように、長期的展望に立った段階的・継続的な取り組みを心掛け、姪浜ならではの地域特性を活かしたまちづくり・景観づくりの土台をつくってきた。

話題提供5：菊地成朋(九州大学大学院)
「歴史資源をつなぐ物語と担い手」

4名の話題提供のうち、特に北島氏と大塚氏は実際に現場で汗をかいてこられた方々である。「点在する歴史文化遺産をまちづくりに活かす」ためには、マチの特徴によってスキームが異なると思う。八女福島や太宰府のように圧倒的な文化財があるマチと異なり、姪浜や箱崎のようなマチでは点在する歴史文化遺産を単なる足し算ではなく繋ぐ工夫が必要となってくる。他の宿場町と連携しているという「唐津街道サミット」の活動も効果があるだろうし、最も重要なことは「市民に開くこと」であろう。

討論・総括

討論では、①しくみをつくる②取り組みで点をつなぐ③人材で守る・受け継ぐ、をキーワードとして進めた。歴史文化遺産を行政から市民の手に移行しようとする動きのなか、専門家に丸投げするのではなく、市民の力で守っていけるよう行政は支援することになる。何より、市民が志を持って楽しく保存活動を担われることに期待したい。



福岡市の交通と都市の姿130年

(株) 福山コンサルタント 中村 宏

パネラー 辰巳 浩 (福岡大学 工学部社会デザイン工学科 教授)
 梶田 佳孝 (東海大学 工学部土木工学科 教授)
 大井 尚司 (大分大学 経済学部経営システム学科 准教授)
 司会 中村 宏 ((株) 福山コンサルタント 上席理事)

●主旨説明

市制施行以来、現在までの130年の歴史(M22～H30)を交通網整備の視点から捉え、パネラーからの話題提供を受け、交通とまちづくりのこれまでとこれからについて議論した。

福岡市の交通は明治中期、鉄道、船舶だけだったものが、明治後期、博覧会輸送手段として路面電車が登場し、その後、バス、タクシー、飛行機が加わった。昭和に入り橋梁、幹線道路の整備は進んできたが、道路交通はあまり重要視されていなかった。高度成長が始まる昭和30年代から人口増加、モータリゼーションの進展に対応するため、急速に交通網整備が進んだ。昭和50年代に入り高速交通時代の幕開けとともに新幹線、高速道路、空港等が建設、連携され、そのポテンシャルを活用し、都市機能の集積、充実が図られ、人口150万人を超える九州の中核都市に成長してきた。(中村)

●話題提供(1)

人口推移と区画整理、再開発による市街地整備の変遷をまちづくりのコンセプトと対比させ紹介した。まちづくりの方針は、天神、博多駅2つの交通拠点を中心とし、当初の工業偏重からその方針転換を行い、都市圏中心都市、さらにアジアを意識した交流拠点都市へと時代にに応じて変化してきている。

また都市構造可視化サイトを活用し、意識共有のためのビジュアル化の重要性を確認した。(辰巳)

福岡市の幹線道路網について、その機能、種類、形態の切り口から、その変遷を紹介した。現在都市計画道路の整備率は、88%と高位にあり、高速道路と都市高速道路との直結による効果、環状路線整備による都心流入交通の削減等、ネットワーク効果による交通環境の改善がみられ、公共交通への寄与もあわせて効果としてあらわれてきている。(梶田)

交通は、人流と物流を合わせたもので、単なる移動ではなく、「社会性創出のツール」であり、「交わる」そして、「通じる／通い合う」ものである。九州の公

共交通は、バスのウエイトが高く、民間が主体となって運営してきた。福岡市の生活交通条例は全国に先駆けて制定されたものであり、「企業」と「地域」の協力のもと住民の利便性を確保しようとする新しい試みも始まっている。(大井)

●話題提供(2)

福岡市の将来人口フレームは160万人であるが、周辺から吸いとるだけでなく都市圏の核として、更なる拡大をめざすのも一つの考え方である。都市開発と交通は一体的なものであり、アイランドは、非常時等を考慮し、更にアクセス性を高めておく必要がある。また、単に公共交通へのシフトだけでの対応は非現実的で、地域、拠点の内容、交通の質等にあわせて、道路、公共交通の組合せを考えることも重要である。またウォーターフロント等拠点開発は、先行投資として夢のある絵を描くことも、地域のリーディング都市としての責務である。(辰巳)

自動運転は、郊外部のラストワンマイルへの対応、貨物輸送への対応等が検討されており、将来的には、都市交通体系全体が大きく変わる可能性がある。ウーバーの活用によって自動車交通量が1.5倍になったという負の側面も報告されており、導入にあたっては、ハード、ソフト両面からの課題解決が必須である。(梶田)

福岡空港は、地場連合による民営化が決まったが、地域の活性化ツールとして空港を考える必要がある。滑走路増設中であるが、福岡だけでは、増大する航空需要に対応できない可能性がある。海外では第2空港をうまく活用しており、北九州、佐賀空港を第2空港として位置付け、地域全体のポテンシャルをあげることも重要であり、空港間連携の交通ネットワーク整備が望まれる。(大井)

●ディスカッション

宮崎県西米良村におけるふれあいバスでは、ふれあいの場、地元雇用、貨客混載、高齢者の声掛け等様々な付加価値が創出されている。

立地適正化計画、地域公共交通形成計画など、土地利用と交通を一体的にとらえるような制度設計が進展してきている。今後は新技術、持続可能性を常に意識し、長期的視野で都市計画と交通を捉えていくことが肝要である。

「暮らしかた」から考える地域の再生

九州大学大学院 准教授 黒瀬 武史

1. 開催趣旨

人口減少が進むなかで、地域外からの移住や、観光を中心とした交流を促すためには、その地域ならではの特徴ある「暮らし」のあり方を見つめ直すことが求められている。福岡都市圏でユニークな「暮らしかた」を見出し、取り組みを進める実践者の方々と、新たな地域再生のかたちを議論する。

2. 宗像市日の里 (日の里暮らしの編集室 柴田建)

福岡を代表するニュータウン、日の里を対象に活動している。ベッドタウンから、色々な家族や機能がミックスした街に変えていくこと、そのためのシェアの仕組みや居場所づくりが必要だろう。自由度が高い戸建て住宅地だからこそ、住まいのリノベーションだけでなく、工房など敷地の一部の用途を変えて利用できる可能性がある。女性や農家など、郊外ならではの創造的な担い手が集まれるサードプレイスとして、自由な場所も大切だ。最近では、住民に閉じた自治会だけでなく、民間企業ともネットワークを作った進め方を模索している。

3. 能古島 (能古島みらいづくり協議会 水谷元)

福岡市西区の能古島において空き家を活用した移住プロジェクトを展開している。小さい範囲から丁寧に進めていくこと、空き家を作らない地域文化を醸成することを大切にしている。具体的には、移住希望者向けに町歩きをしながら地元の人と触れ合えるツアーの開催や、地権者の負担が少ない空き家の借家化の仕組み(3年間の定期借家で契約、改修費用は入居者負担)だ。福岡市が導入した区域指定型緩和制度は、住民主体で市街化調区域の規制の緩和を検討できるが、地域環境が大きく変化する可能性があり、専門家の助言が必要だ。住民の理解が不十分のまま自治会だけで話が進むのも良くないので、住民が中心となり慎重に検討している。

4. 「樋井川村」(樋井川村村長 吉浦隆紀)

福岡市城南区の旧樋井川村の範囲を中心に活動している。築40年以上のマンションの大家として、スケルトンの状態から入居者と間取りから考え、自分でDIYして部屋を作っていく。そうすることで愛着が湧き、さらに入居者で交流が生まれる。場所や築年数は変わらずとも、入居者が自発的に活動し、生まれる環境によって魅力が向上する。近年は、住まいだ

けでなく、地域交流スペースや工房を設けているが、そのことでエリアの価値、賃貸住宅の価値が向上する可能性がある。これからの郊外には、民間が運営する公民館のような自由な場所が必要ではないか。

5. 那珂川町 (株式会社ホーホウ取締役 森重裕香)

福岡市の南側に位置する那珂川町で活動している。郊外住宅地に、大きな資本が入り、サービスをする側とされる側の構図が固定されてしまうという問題を指摘したい。自分たちで考えて暮らしの選択肢を広げる文化を作ることが必要だ。ホーホウは、駅ビルを拠点に、ビルの使い方の幅を広げて価値を高めること、外から入ってくる人が事業をできる土台を作ることを目指している。また、町で採れた野菜を使った子供の料理教室を行う地産地消、ワークスペースを拠点に創業支援や就業支援などの仕事をテーマに活動を進めている。新たなコミュニティを作って、発信したことを定着させ、雇用したり独立したりすることで活動が地域へ発散されることを目指している。

6. トークセッション

人口減少が進む郊外では、個人の趣味や民間の活動が公共の役割を変えていく時代になりつつある。そのなかで、住民(民間企業・NPO)と行政、そしてコンサルタントの役割が議論された。プレイヤーの立場からは、住民からのボトムアップを基盤に、公共性を内包する住民や民間の活動を支える仕組みや支援を行政に求める意見があがった。また、行政の限界も意識しつつ、住民は思考停止せず自ら動くことが重要であること、コンサルタントは計画を作るだけでなく、住民の思考を深め、その先の活動へ展開させる役割を担うべきとの指摘もあった。個性的な「暮らし」を担うのは、その地域を深く知り、楽しむ「ひと」である。各々の郊外の魅力を発見し、地域の活動を生み出すためには、それを担う人材を地域から育てられるような仕組みが必要なのであろう。



会場の様子(左下から水谷氏 吉浦氏 森重氏 柴田氏)

公共性と事業性の間

熊本県立大学准教授 鄭一止

■はじめに

2015年東京で日韓まちづくりフォーラムが開催された以来、第2回フォーラムが今年開催された。韓国と日本のまちづくり関係者が集まり、各々のまちづくりの実践手法や取り組み状況、制度体制等について相互に情報交換し、2国の実践家研究者間の交流を深めた。

前回は中間支援組織としてまちづくりセンターの在り方について議論されたのに対し、今回はまちづくり支援を行うとともに自立的に事業を進めている民間と言える社会的企業も多く参加し、公共性と事業性(経営)の間でのバランスのとり方について議論を交わした。

■発表1 韓国・広州の1913松井駅市場での取り組み((株)カルチャー・ネットワークの尹ヒョンソク代表)

カルチャー・ネットワークは、韓国・広州市でまちづくり支援からリノベーション企画運営まで幅広く手掛けている。具体的には、衰退していた松井駅前にある市場を再生した取り組みが紹介された。1913年、松井駅の開通とともにつくられた松井駅市場の歴史性を大切に、名前に1913を加えた。また、各店舗のヒストリーとこだわりを引き出した上で、看板、のれん、ファサードのデザインとして見える化した。空き店舗では、エネルギーでやる気のある若者を集め、ここにしかないオンリーワンの店づくり支援を行った。さらに、市場内に駅の待合室を設けることで、駅利用者が気軽に寄れるように仕込んだ。今は毎日2000人が訪ねる名所となっている。しかし、地価が著しく上がってしまうジェントリフィケーション現象が起きつつあり、今後の課題と言える。

■発表2 ビンテージビルの取り組み((株)スペースRデザインの吉原勝己代表)

(株)スペースRデザインの吉原勝己氏は、ビルオーナーとして、築100年残る空きビルの再生に取り組んでいる。開かれていること、ユニークであることを意識することで、時間が経つにつれ、ビルの付加価値が上がる効果生まれている。一方、各地ともチームを組み、ノウハウを伝授するとともに意識の共有を広げようとしている。「わざと、ジェントリフィケーションを起こすことで、ビルとまちの価値を上げている」という話では、土地・建物の所有者の意識がいかに大事かと改めて考えさせられた。また、日韓

のジェントリフィケーションの異なる状況についてもっと話すべきだと思った。

■発表3 福岡地域戦略推進協議会(以下、FDCと省略)の取り組み(FDCの榎本拓真 事務局長補佐)

FDCは、地域の成長戦略の策定から推進までを一貫して行う、産学官民一体のシンク&ドゥタンクである。例えば、福岡市と連携し、スタートアップ支援を行っており、旧大名小学校を改修しインキュベーション施設としてオープンした。スタートアップ企業に対し、フルサポートを行っており、実証実験から社会実装に至る支援体制を構築している。一方、優先的に投資を呼び込む戦略的都市開発エリアを定め、計画的に開発を誘導する取り組みを進めているなど、様々な事業を行っている。

■発表4 練馬まちづくりセンターの最新状況(練馬まちづくりセンターの浅海義治所長)

長年まちづくりかかわっている浅海義治氏によって協働まちづくりについて、公共施設づくり、景観環境の保全、地域コモンズの創出、公民連携による公共空間の活用、官では手の届かない社会サービス提供、地域ブランディングとマネジメントという切り口で事例が紹介された。2006年に開設した練馬まちづくりセンターの活動によって、多くの主体が生まれており、最近では主体間のネットワークづくりが大きなテーマになっている。

■議論

議論の前に(株)ビルドの林ヒョムク副代表と(株)地方の趙グウンヌン代表により、取り組みの紹介があった。

その後、支援者と経営者という様々な立場から公共性と事業性のバランスに対する感覚の違いについて議論がされた。例えば、韓国側の参加者より、まちづくり支援も経営を成り立たせるための一つのツールであるという新しい見方が紹介された。最後には都市環境研究所の高鍋剛氏より、歴史、ブランド、アイデンティティ、経済、コミュニティをトータルに表現する意味としての「デザイン」という用語が改めて提示された。



高鍋剛撮影

熊本地震と九州北部豪雨から考える地区レベルの復興

熊本県立大学 柴田 祐

●はじめに

まちやむらなどのコミュニティ単位の復興は、住民同士で話し合いを重ねる必要があるが、住民自身が被災者であり、さらに高齢化、人口減少、コミュニティの維持など災害以前から抱える課題は、被災により深刻になる。そこで、熊本地震と九州北部豪雨を対象として、地区スケールの復興における課題について、お互いに理解を深めながら、地区としての復興のあり方について意見交換した。

●益城町における集落部の復興まちづくりについて／宮田有佳（益城町復興整備課まちづくり推進室）

これまで1年半のまちづくり協議会の活動を振り返ってみると、新しい地域のリーダーやキーマンの存在に気づくことができたこと、これから地域を動かしていく若い人とのつながりができたことは町としては非常に大きなことであると思う。一方で、協議会によって活動に温度差が出つつあり、それぞれの地区の住民の方が無理なくできる目標を探しながら、他の担当課との関係も作りながら進めていきたい。

●櫛島地区における復興まちづくり／古荘直樹（櫛島地区まちづくり協議会会長）

櫛島地区では、町長にまちづくり提案書を提出した後、最初にやったイベントとして、昔から続いている千灯明というお祭りを少しだけ盛り上げて実施してみたり、10数年ほど前からなくなっていたお花見を避難訓練とあわせて復活させたりしてきた。何でもかんでもやるのではなく、少しだけがんばって、長く続けることを意識してやっている。今後の課題としては、避難地や避難路の整備に際して、地権者と町の間でまちづくり協議会がどういう形でサポートできるかを考えていきたい。

●朝倉市における復興まちづくり／梅田功（朝倉市復興推進室室長）

復興推進室は今年7月にできたばかりで、今後、住まいや集落の復興を重点的にやっていくことになっている。朝倉市にもまちづくり協議会があるが、旧小学校区を単位としたコミュニティ組織をベースとしている。住まいの再建の意向調査では約半分の方が元の集落に戻りたいと回答しているが、原形復旧ではなく改良復旧する河川の線形が今年7月に示され、ようやく住まいとコミュニティの再生の話ができる

ようになってきた。一方で、住まいの再建の目処がたっていない方が300世帯ほどあり、1軒1軒サポートしていきたい。

●朝倉市における復興まちづくり／師岡知弘（朝倉市集落支援員）

朝倉市の中でも人口減少や高齢化が特に厳しい高木地区について、過疎化と高齢化が徐々に進んでいたものが、今回の災害により一気に進んでしまった。高木地区でも復興まちづくり協議会が設立されているが、限られた時間で、人口も経験も少ない中で、どこまでできるのが課題で、10年後20年後の話まではなかなかすることができないでいた。そんな中、有志16人が集まって黒川未来会議という取り組みをはじめつつあるところである。

●ディスカッション

東京大学生産技術研究所の加藤孝明教授をモデレータにディスカッションを行った。

- ・何か目標があるとそれに無理矢理あわせようになってしまうので、まちづくり協議会では議論をただ聞くようにしている（宮田氏）
- ・地震前からの課題の解決も重要で、復興をしたいわけではなく、集落興し人興しをしながら楽しかった頃の集落を取り戻したい（古荘氏）
- ・市役所職員の数や予算など非常に厳しいが、一つの災害が次の災害に活かせる教訓になるという自分たちの役割もあると言い聞かせながらやっている（梅田氏）
- ・膝詰めで話し合う場を繰り返し持つことでお互いに理解が深まるのではないかと（師岡氏）
- ・行政も一緒に考える場、一市民として発言できるような場を作るのがよいのではないかと（加藤教授）



観光からはじまる景観づくり

LOCAL&DESIGN 株式会社 福田 忠昭

●フットパス／内田晃（北九州市立大学）

フットパスとは、ウォーキングと異なり、もっとゆっくり歩くランプリングである。イギリス発祥で、観光振興の目的が強い「オルレ」よりも地域づくりとして地域住民がより深くかかわっている。福岡県中間市では、遠賀川ポンプ室が世界遺産となったが、それを機に観光PRを考えて取り組みが始まった。地域住民から参加者を募ってコースづくりを行い、現在5コースで、年に数回イベントが行われている。観光としては交流人口の獲得となり、活動に関わることで地域のコミュニティが活性化し、素朴な風景が維持される。

●観光列車／吉中美保子（西日本鉄道（株））

2019年春に運行開始予定の「THE RAIL KITCHEN CHIKUGO」を通じた地域の活性化に取り組んでいる。電車は、今や、「早く・安全に・大量に・運ぶ」という役割に加えて、「楽しさ・快適さ・情報発信」ということが求められる。物理的に場所をつなぐだけでなく、地域の魅力を発信する媒体として、人や物語をつなぐ電車にしたい。沿線の工芸品を用いた内装や、車内で提供する地元産の農産物を使った食事、その背景を知ることで、これまで見ていた車窓の見え方が変わると思う。

●着地型観光／高山美佳（LOCAL&DESIGN（株））

着地型観光の「久留米まち旅博覧会」は、ひとつひとつは小さなプログラムだが、編むことによって、まちと風景、人がみえる取り組み。体験を通して、何気なく見ている農の生産風景も、日々の暮らしとつながっていることがわかる。地元で暮らして生業ながら観光にも関わると「景観に食べさせてもらっている」という気持ちになる。福岡県柳川市で景観計画のルールやその大切さを伝える冊子をデザインした時も、水郷柳川の掘割は農業用水であり、麦秋の畑を潤し有明海へとつながっていることを伝えた。この風景や産物があつてこそ、観光客が来て経済が生まれ、まちが元気になる。経済があることで、将来、子どもたちも戻って来ることができる。

●パネルディスカッション／進行：高尾忠志（九州大学）

高尾：「景観」とは、「見る人」と「見られるもの」の掛け算によって生まれるもの。目に見えない風景をどう感じてもらうか。物語をうまく伝える、共有する仕組みが重要では。

内田：「見られるもの」をデザインするのが景観の主流だと思うが、見る人の価値観を変えていくことで、景観が変わる。フットパスでも、ガイドをつけているが、なるべくガイドしないようにして、歩く人たちが自分たちで感じながら歩いてもらうようにしている。見ている人の感性をどうデザインするかを意識している。

吉中：電車から見える風景は、そこまできれいな田園風景とは言えない。しかし、小麦と稲の二毛作の風景は、九州など限られた場所ではしか見ることができない。普段は何も考えずに見ている風景も、その背景を知れば、特別な風景に見えてきて愛着がわく。

高山：日々の暮らしの中では、目の前の景色だけを見て、恩恵を感じながらも、自分もその風景の一部を担っているということを忘れがち。それをいかに意識させるかが、そもそもの景観の活動の始まりではないか。

高尾：観光と都市計画、市民と来訪者、内部の産業と外部のデザインなどの多様なマッチングの事例であった。観光と都市計画の橋渡しのようなことが非常に重要だが、行政的には縦割りのまま。一体的に環境を作っていくために双方の理解を得ながらやっていくことが改めて大事。都市デザインは都市部で確立されていて、今後、田舎の風景に合うようなデザインの手法も必要だろう。



新しい大学像を展望する — 伊都キャンパスツアー

全国まちづくり会議実行委員会委員長 九州大学大学院教授 坂井 猛

■はじめに

1911年より百年にわたり建設されてきた箱崎キャンパスの施設群が次々と老朽化し、学生数の増加とともに研究教育施設は手狭になり、戦後統合した六本松の低年次教育と専門教育とのキャンパス分離による不便、さらには福岡空港を離発着する航空機の騒音などが移転の主な理由でした。学内に設置した専門委員会によって、福岡都市圏における複数の候補地をとりあげ多角的に比較検討して、都心部から15km西方の福岡市西区、糸島市に跨る元岡・桑原地区を移転候補地として評議会決定したのは1991年10月でした。当時、全国の大学は明治期より稼働してきた制度の旧弊を改革する必要に迫られ、九州大学は全国に先駆けて導入した学府研究院制度などの新しい大学像を、フィジカルな空間として実現できる絶好の機会としてキャンパス建設を捉えることになり、増殖改変が容易な施設構成をもつ施設群を計画することになりました。

■移転完了

現地調査と構想策定、計画プログラムの作成、造成基本計画を経て、2001年3月に策定した新キャンパス・マスタープラン2001に基づき、5つの地区基本設計（ブロックプラン）で配置等を策定したうえで、学生が郊外型のキャンパスライフを送るための生活支援施設や交通施設、学府研究院という新しい制度をふまえた建築基本設計、建築設計を行い、施設を建設し、2017年10月の工学部を皮切りに順次移転を進めてきました。移転候補地の決定から27年を経て、伊都キャンパスとして2018年10月に一応の完成をみたことから、今回のエクスカージョンを企画しました。

■キャンパスツアー

エクスカージョンでは、今年竣工した施設を中心に、坂井猛、山王孝尚（キャンパス計画室）が案内しました。まず、伊都キャンパスの情報発信施設ビッグオレンジ（設計：石田壽一）に9:30に13名が集合し、マスタープラン2001（九州大学+三菱地所・シーザーペリ・三島設計共同体）、センター地区基本設計（九州大学+黒川紀章・日本設計）を説明した後、センター2号館、ゲートブリッジ（設計：黒川紀章・日本設計）、中央図

書館（設計：石本建築事務所）、イースト1号館（設計：石本元建築事務所）展望室、椎木講堂（設計：内藤廣）、ウエスト1号館（設計：ペリ・クラーク・ペリ）をまわりました。建築だけでなく、キャンパスを構成する緑地等の調査で明らかになった生態系や埋蔵文化財についても説明し、理解を深めていただきました。

■展望室

古代からアジアの玄関口としての役割を果たしていたこの地域からは、6世紀前後の遺跡が眠っていました。古墳74基のうち39基を現状保存しましたが、削平した前方後円墳石ヶ原古墳の位置に展望室を設置しました。新たに開設したイースト1号館のこの展望室では、展示物の設置作業をしていた総合研究博物館の岩永省三教授にお願いし、伊都キャンパスで出土した製鉄遺稿や古墳の状況、古墳頂部から見えていた風景について解説していただきました。一行は再びビッグオレンジに戻り11:30にツアーを修了して散会しました。参加いただいた皆様、ありがとうございました。

■おわりに

九州大学は伊都への移転を終え一応の完成を見ました。現在、キャンパスを実証実験の場として、水素エネルギー、AIオンデマンド交通、自動運転などが展開しています。社会実装の実験装置としての伊都キャンパス整備とあわせて、地元経済界、行政、国の機関とともに2001年に策定した九州大学学術研究都市構想の実現に向けて、伊都キャンパス周辺の糸島半島を1次圏域として、研究関連の企業や大学周辺のまちの機能の整備をすすめています。これまでの整備を補完強化するための次のステップに向けた計画がキャンパス周辺で進行中であり、伊都キャンパスを核として、常に未来の課題に挑戦する都市であり続けたいと思います。皆様のご支援を宜しくお願いいたします。



伊都キャンパス

ポスターセッション+プレゼンタイム

株式会社 地域計画連合 田嶋 麻美 株式会社 都市環境研究所 手島 朋之

ポスターセッションは、全国の草の根まちづくり活動を行っている団体が自主参加型で出展する全まちの定番プログラムであり、2018年度は、全19団体(33区画)に出展いただいた。また、1日目の午後には、互いの活動を紹介し、意見交換を行うプレゼンタイムを実施し、全11団体に参加いただいた。

【ポスターセッション出展団体】

※プレゼンタイム参加団体

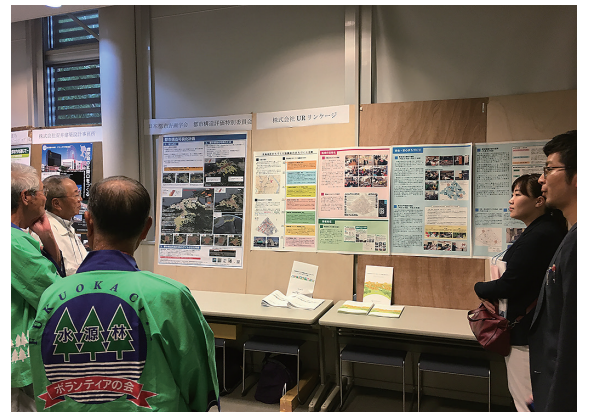
- ①日本都市計画学会 都市構造評価特別委員会
 - ②街づくりAi研究会 ※
 - ③一般財団法人都市農地活用支援センター ※
 - ④JSURP生産緑地研究会 ※
 - ⑤福岡市(住宅都市局跡地活用推進部)
 - ⑥アトリエカノン ※
 - ⑦姪浜西南大学まち(西南学院大学教育インキュベートプログラム) ※
 - ⑧JSURPルーフスケープ研究会 ※
 - ⑨福岡県都市計画課(福岡県美しいまちづくり協議会) ※
 - ⑩福岡市水源林ボランティアの会 ※
 - ⑪こちらのゾーン
 - ⑫福岡市住宅都市局地域まちづくり推進部都市景観室
 - ⑬環境演出家協会インストラクター金澤バイオ研究所
 - ⑭あまみず社会研究会
 - ⑮NPO法人熊本まちなみトラスト
 - ⑯株式会社URリンケージ ※
 - ⑰株式会社安井建築設計事務所 ※
 - ⑱積水ハウス株式会社福岡マンション事業部 ※
 - ⑲独立行政法人都市再生機構
- (以下、丸数字はプレゼンタイム参加団体の番号)

本年度は、全19団体のうち、地元福岡県内で活動されている団体の出展が10団体であった。プレゼンタイムに参加いただいた団体からは次の報告が行われた。まちびらきから13年が経過し、まちづくりが着々と進展しているアイランドシティの現在(⑱)、学生の社会性をまちの中で育む姪浜西南大学のインキュベートプログラム(⑦)、スケッチを通してまちの風景を見つめ直すアトリエカノンの活動と、景観まちづくりのプラットフォームとなる県の美しいまちづく

り協議会(⑥、⑨)、水不足という福岡市の都市課題から水源涵養林に着目したボランティアの多様な活動と展望(⑩)。いずれの取組も、各テーマに合わせた参加の形や関わる人々の巻き込みが工夫されており、人やまち、地域の関係性の構築が試行されていた。

福岡以外の地域からは、建築を通して人やまちに活力を持たせる九州の拠点施設の設計事例(⑰)、瓦の良さを見つめ直し、瓦を通して考える景観(⑧)、コミュニティの結束力を活かして展開する防災まちづくり(⑯)、法改正による都市農地との新しい関わり方とその広がり(③、④)、進化するAiの存在と影響(②)について、活動報告やメッセージの投げかけが行われた。④の生産緑地については、福岡県内で制度運用を行っている自治体は福岡市のみであり、首都圏との課題の違いが認識された。次回以降、開催都市の地域性を深掘した展示や交流の企画が実現できると面白い。

最後に、本企画に参加いただいた皆様に、深く感謝申し上げます。



人が集まる場のつくり方

福岡ピクニッククラブ 片田江 由佳

1. 開催趣旨

多くの中心市街地で、街なかに人が集まらない、賑わいが失われたという嘆きが聞かれるようになって久しい。一方で、従来のやり方とは異なる方法論で、果敢にチャレンジし、新たな賑わいの場、コミュニティの場をつくる試みが行われている。今回は場づくりを現場で苦闘しつつ実践しているプレイヤーが「人が集まる場」について語り、その「作り方・プロセス・仕組み」について意見交換を行う。

2. キャッセン大船渡 臂徹/岩手

場づくり＝空「間」＋時「間」＋人「間」の組み合わせ
 キャッセン大船渡は、津波で被災した岩手県大船渡市の中心市街地の商業・業務エリアの整備とエリアマネジメントを推進。フラッグによる景観統一、広場空間の形成、商店主による教室などの「創出」を試みるとともに、地元と連携した環境美化活動や、雑草を肥料等に活用する資源循環の保全を実施。また、日常的空間を非日常利用して変化をつけている。時間を考慮し、創出される効果やリソースを考えることが成功につながる。

3. グループデザインズ 三谷繭子/広島

場の価値＝偶発的な出会い、プロセスの共有、人を感じたいという欲求の解消
 公共空間を活用した地域再生、エリアマネジメントの仕組みの構築などに取り組む。

広島県福山市の駅前空間における社会実験では、街なかに人を呼び戻し、回遊性や居心地を向上させるため、マーケットや本棚、座れる空間づくりを行い、検証を繰り返しながらニーズを測っている。コミュニティと共に、どう場を形成するか。日常性はすぐには作れないため、小さな日常と非日常を馴染ませ、じわじわ作っていく手法を用いている。

4. ハートビードプラン 泉英明/大阪、山口

場づくり＝物理的空間：つくる＋人間の活動：つかう
 つかう目線で従来のプロセスを逆転し、「ビジョン→運営・マネジメント→マスタープラン→設計・ハード整備」と事業性を確認しながら進めることが必要。

大阪の北浜テラスは、中之島公園を望む川沿いに、1ヶ月テラスを設置したところ好評を得たため、常設化。現在は約50名のオーナーが参画、利用者は20万人と、エリアの変化を感じる。

山口県長門市の湯本温泉では、星野リゾートがマスタープランを描き、市が周辺のランドスケープを整備。コア事業である外湯の建て替えでは、公設公営ではな

く、民設民営の定期借地で公募。地域の合意を得ながら、公共空間をつかう仕組みづくりなどを進めている。

5. 油津応援団 木藤亮太/宮崎、福岡

「人が集まる」ことで、空気感が変わり、人と人がつながり、新しい意味が見えてくる

宮崎県日南市の油津商店街のテナントミックスサポートマネージャーに公募で採用され、3年間で29の事業所を生んだ。空き店舗等をリノベーションし、市民スペースや屋台村などを創出。まちを応援する株式会社を立ち上げ、市民出資による資金調達を実現。過去の機能の「再生」ではなく、アイドルの活動やITオフィス、子育てなど、これまでなかった目的で人が訪れている。

6. ボンドアート 富永ボンド/佐賀

場づくり＝場つなぎ

佐賀県多久市で「アートのまち多久」のブランド化に取り組む。アートスタジオ「ボンドバ」では、アトリエを開放してカフェバーやイベントを定期開催。また「ウォールアートプロジェクト」は、中心市街地に作家の壁画を創設し、ファンによる観光・回遊や老朽化した街並みの景観改善を狙う。「えのぐアートギャラリー」を貸しスペースとすることで、その収益を壁画の創設費用に使用している。3つの場をつなぐことで、市の新たな観光資源にしたい。

7. 福岡ピクニッククラブ 片田江由佳/福岡

場づくり＝様々なヒト・モノ・要素のコミットを得て、可能性を試すプロセス

福岡のまちを使いこなす人を増やし、目指すことを目的に、2013年に有志でクラブを結成。公園やビルの屋上などランドマークや穴場に、料理や過ごし方を持ち寄って交流。ピクニックなら誰でも気軽に街なかに居場所をつくることができる。その楽しいな振る舞いが伝搬し、街のムードを高める。一人ひとりがまちにワクワクし、様々な可能性を試すことが、まちをより個性的なものにしていく。

8. テーマセッション・クロストーク/モデレーター：渡会（日本都市計画家協会）

幅広い6者の活動をさらに深掘りし、ニーズのつくり方、プレイヤーとの出会い方、開く／閉じるの塩梅、撤退ポイントなど、場づくりの過程における様々な実践や工夫について意見交換。人同士のつながりの連鎖をどう作っていくか。場の可能性を広げていく仕組みを持ったまちこそが賑わいを高められるのではないか。熱い議論は3時間半に及んだ。

福岡の地域性が育む“まちビット”とは

認定NPO日本都市計画家協会理事 (株)Groove Designs代表 三谷 繭子

開催趣旨：福岡の「まちビット像」を探る。

「まちビットトーク」は、JSURP若手ワーキンググループから始まったまちビット会議WGがはじめた取り組みである。昨今、従来の都市計画や、課題解決型まちづくりの枠では捉えられない新しいまちづくり活動が起きている。それらの活動の基点となる人物を本WGでは「まちビット」=自己流の活動がまちに影響を与えた人と定義し、参加者との対話を通してその「まちビット像」を捉えていく。

まちビット (話題提供者)：

特定非営利法人循環生活研究所 たいら由以子氏
ON THE STAGE 下野弘樹氏

コーディネーター：

日本都市計画家協会、(株)Groove Designs 三谷繭子
福岡ピクニッククラブ 片田江由佳

まちビットトーク1：ヒトゴト層を巻き込む「ローカルフードサイクリング」

約20年前に始めたこの活動は、毎日の食卓から出る生ごみを堆肥化するコンポスト普及活動からはじまった。生ごみの堆肥化は、それを再活用することで安心安全な食が確保され、同時に生ごみを燃やすエネルギーも削減することができる。ごみ焼却にかかるエネルギーコストは、人口が集中する都市における社会問題でもある。これらを解決するために、生ごみを燃やす「廃棄物」ではなく、堆肥化による「資源」へと変えているのがたいら氏の活動だ。

現在では、ある一定の小さなコミュニティ内で、だれでも参加できる食料サイクルをつくる活動「ローカルフードサイクリング」へと展開している。半径2km圏内で、住民が生ごみを堆肥化し、それをオリジナルベロタクシーで回収して周り、その堆肥で野菜をつくる。その野菜は、コミュニティ畑やマルシェで堆肥の作り手に戻り、安全な食が提供される。まさに循環生活を実現している取り組みだ。たいら氏がこの仕組みに辿り着いたのは、「どうしたらみんなが楽しくコンポストづくりに参加できるようになるか」を考えた結果だという。この活動に参加し始めたひとの96%が継続しているということも特筆すべき点だ。ヒトゴト層を巻き込むための工夫が、地域の生活すらも変え始めている。

まちビットトーク2：まちに人がチャレンジできる舞台をつくる

下野氏は、「まちに舞台をつくる」をコンセプトに、様々な小商いのための場づくりや場の企画運営などを行なっている。はじめは、福岡市内につくった「清川リトルスタンド」。元遊郭だった建物をDIYでリノベーションし、クラフト作家のこだわり作品が並ぶショップに変えた。それによって、清川ではマーケットやイベントなどが開催され、日常的に人が集まる場所へと変化していった。その後、次々とシェアキッチンや小さな小商の実践スペースを企画し、現在は大型商業施設からも小商スペース企画の依頼が相次いでいる。

下野氏が行なっていることは、単なる場作り・空間づくりではなく、「場所×機会」をつくり、個人の人生をデザインするという意識をしているという。それが徐々に、人がまちへ関わる機会と理由をつくることに繋がっていった。今後は、舞台に上がる人だけではなく、「舞台をつくる人」も増やして行きたいと語った。



ディスカッション：福岡のまちビット像とは？

オーディエンス参加型で行なったディスカッションでは、活動持続のコツ、自らの個人的な活動からまちを意識した活動へ展開したきっかけなどについて意見が交わされた。たいら氏は、活動持続や様々な困難を乗り越えたポイントについて「一番は、楽しいから」と語った。また、活動のモチベーションについて、下野氏は「小さくチャレンジできる場を作ることで、最終的には自立度・自由度の高い人を増やしたい。やらない理由をなくす環境つくるようアプローチしている」と語った。

まとめ：福岡のまちビット像=関係性をつくりやすい福岡のまちのスケール・新しもの好きの気質・周囲の許容性

本セッションでは、福岡が育むまちビットの特性について、福岡というまちのスケールから、人と人とが繋がりやすい環境があるという点、また、新しいもの好きで何かを始めやすい気質があるのではないかと、意見が聴衆、まちビット自身からも述べられた。

たいら氏、下野氏のトークの端々からは、個人のミッションから、人の生き方や暮らし方を変える媒介として、最終的にまちを変える存在となっていく現代のまちづくりプロセスが垣間見えた。

ejob 事業はこれからの都市計画に貢献するか？

ejob 事業運営委員会事務局 大口 寛貴、北本 美江子

●開催趣旨

ejob 事業とは、都市計画4団体（都市計画学会、都市計画協会、都市計画コンサルタント協会、都市計画家協会）によって運営される、自治体発注による都市計画コンサルタント業務の中で、発注自治体に優良と評価された業務を登録・公表する事業である。

ejob 事業は2年間（平成27年～平成28年）の試行期間を経て、昨年度（平成29年～）より本格実施を開始し、現在は、113自治体※1の協力と100件※1※2の優良業務が登録されているが、協力自治体・登録業務数ともに十分とは言えず、ejob 事業について自治体・コンサルタントにご理解いただくことが喫緊の課題となっている。当分科会では、ejob 事業の周知とこれからの都市計画にejob 事業を役立てる方法を模索することを目的に、業務の根底にある「自治体とコンサルタントの関係」について議論したうえで、「ejob 事業」について意見や感想を述べていただいた。登壇者は以下の通り。

	氏名・所属
学識	両角光男 熊本大学顧問・名誉教授（座長）
	趙世晨 九州大学教授
自治体	福岡市 大西信也氏 都市計画課長
	北九州市 内藤隆氏 計画調整係長
	相模原市 安藤裕之氏 認定NPO法人都市計画家協会理事
コンサルタント	パシフィックコンサルタンツ（株）九州社会マネジメント部 総合プロジェクト室室長 中堅信悟氏
	（株）まちかん設計 代表 徳田剛一氏
	（株）都市環境研究所 九州事務所副所長 池田準哉氏
	（株）オオバ九州支店 まちづくり部長 西口徹氏
	（株）福山コンサルタント 地域計画・福岡グループ課長 山本英治氏
	日本都市技術（株）西日本支社都市整備部部长 田川英一郎氏
	第一復建（株）技術本部長 箱嶋斉氏

※1 2018年9月8日現在 ※2 試行期間を含む

●議論の内容

(1) 「自治体とコンサルタントの関係」は担当者間の議論がカギになる

業務遂行に際し、自治体は、自治体の知識を超える提案や地域に即した提案を求め、コンサルタントは、行政をリード（戦略化、行政担当者の教育等）できることや新しいものへの挑戦、トータルサポート、最新の制度・施策への対応などを心掛けている。両者とも、担当者同士のコミュニケーションを特に重視し、自由な議論ができることや成果のイメージ共有等、自治体

とコンサルタントが協力して業務に取り組める環境を望んでいる。自治体によるコンサルタントの評価は、受容力や仕様書プラスαの提案、上記のようなコミュニケーションがうまくできていると評価が高いとのことであった。

(2) 「ejob 事業」は課題もあるが必要な仕組み



コンサルタントからは会社と担当者のPRになり、社内的にも自治体の業務を評価する指標として使えてよいとの意見があった一方で、満足度で評価が決まることに疑問や矛盾も指摘された。また、登録業務数が増えなければ標準的な評価指標にならないこと、仕様書プラスαが評価につながるとの意見に対して、過剰要求などに注意する必要があることが指摘された。

自治体からは業務を評価することが担当者のスキルアップにつながるとの意見の他、課題として、全ての都市計画コンサルタントが参加していない点、希望した業務のみを評価されているため、指名競争入札時に参考にしづらいとの指摘もあった。

その他、試行期間と本格実施の4年間の実績を踏まえたフォローアップや都市計画4団体からの情報発信（登録された優良業務や支部を含めた4団体からの広報等）の必要性、評価の公平性を担保できるような方法の検討などが指摘された。また、委託業務を「評価すべきもの」という視点に立つことやテクリスを補完する制度になればよいといった意見があった。

多数の登壇者から本音ベースのお話をいただき、座長の分かりやすいまとめが参加者にも好評で、ejob 事業の周知を含め、今後の発展に期待できる分科会になったと思う。



エリマネ組織のネットワークを考える

認定NPO日本都市計画家協会理事 株式会社フロントヤード 長谷川 隆三

●フォーラムの趣旨

近年のまちづくりにおいて主要なキーワードとなっているエリアマネジメントは、賑わいの創出やコミュニティの形成など、一定の成果を上げているが、その多くで人的、資金的な活動基盤が弱い状況にあると言える。

エリアマネジメントの活動基盤の強化に向けては、財源の確保が必須であり、その際、行政との連携が欠かせないものとなる。

今回は福岡のエリアマネジメントの経験をベースとしつつ、札幌の事例も理解しながら、課題を共有し、今後の行政とエリアマネジメント組織の係り方について議論する。

●フォーラムの内容

＜小林誠氏（We Love天神協議会）＞

福岡天神地区で活動する小林氏からは、これまで行っている活動として賑わい創出のためのイベントや公共空間活用についてご紹介頂き、特に国家戦略特区として道路空間を活用する“きらめき通り歩行者天国「FUKUOKA STREET PARTY」”を事例に空間活用の具体例を解説頂いた。

また、今後の活動における課題として、歩行者天国の恒常化や新規財源の確保といった点を指摘し、そのベースとして行政との連携が欠かせないという認識を述べられた。



＜谷川麻祐子氏（博多まちづくり推進協議会）＞

福岡博多地区で活動する谷川氏からも、国家戦略特区による道路空間活用としての“ハカタストリートバル”の事例など、活動内容についてご紹介頂いた。

た上で、行政とどのように関わっているのかについて、多岐にわたる部署名を挙げて説明頂いた。

また、今後の活動における課題として、事業ごとに行政の担当が異なり、協議等に時間を要する点などが述べられた。



＜高園英太郎氏（福岡市）＞

福岡市の高園氏からは、市のエリマネ組織への係わり方として、まちづくりのパートナーという認識を持ち、行政からの助言や協働事業への負担や初動期支援という点をご紹介頂いた。

特に初動期支援として、5年間を目途に事務局への人的支援や金銭的支援を行っている事例を紹介頂いた。

また、今回、札幌市からお呼びする予定であったが、北海道胆振東部地震の影響で参加が叶わず、筆者から、札幌市のエリマネ組織の支援内容について説明した。

札幌市では、設立時に稼ぐ手段を用意すると共に、8名のエリマネ担当を置いて、日常的にエリマネ組織とコミュニケーションを図っているとのことであった。

それぞれのプレゼン後のディスカッションでは、エリマネ組織と行政の係わりについて、議論を行い、行政のエリマネ担当が庁内の橋渡しになると共に、エリマネ組織との密なコミュニケーションが重要という点が指摘された。

また、企業と行政、市民がまちづくりの将来像を共有しつつ時代に合わせて事業を展開していくために、ガイドラインの作成とその中での時間軸の捉え方の重要性も指摘された。

「花と緑のまちづくりフォーラム2018 in 福岡」報告

担当理事 井上 忠佳

2004年3月「JSURP美しいまちづくり大会」が名古屋市・犬山市で開催され「美しいまちづくり名古屋宣言」を行ったが「草の根的花と緑のまちづくり」に関わる全国の人たちも多数参加し以降の連携が始まった。

この直前2004年1月福岡市では「全国都市再生モデル事業」として伊藤滋JSURP名誉会長や山野宏氏(当時副市長)等の助言のもと、天神の大名小学校周囲に花壇整備する取り組みが展開され多くの市民達が関わってきた(第一回全まち(2005年)「美しい街づくり奨励賞」受賞)。さらに2005年の「全国都市緑化福岡フェア(アイランド花どんたく)」を契機に、取り組みは一層活気づき以来中心的存在として継続的な取り組みを続けている。今回は、その後の取り組みである「一人一花運動」に接することもできた。

・「第一回全まち」以降も(恵庭市(2008)、川崎市(2009)、東京都(2006,2007、2015)、熊本(2010)等)で、「フォーラム」やパネル展示等を実施してきた。2015年「全国都市緑化愛知フェア」開催時に、JSURP花緑元気研究会は、メイン会場外の街中を会場とし全国的個人・NPO等の取り組み情報ネットワーク化イベントを開始した。

今後、歴史的風土や、自然に立脚し文化に愛着と誇りを持てるようなまちづくり、観光振興、グリーンインフラが機能するまちづくりでは、市民のパワーを生かした「花と緑のまちづくり」を取り入れることが重要だが、現在の行政の花緑のボランティア活用では、上から目線の対応がまかり通っている。公園や街路樹、校庭(及び周辺)等の公的緑の維持管理も、今後は公共の手には負えず市民や民間主体の創造的支援が不可欠になる。

「花と緑のまちづくり」は、今後市民主体の取り組みを気持ちよくすすめる仕組みづくりや、関係者全体の意識改革にむけた取り組み等のスタート等が課題である。今回のフォーラムは市民や民間団体だけでなく、「花と緑のまちづくり」に積極的に取り組んでおられる首長等も参加され、取り組みの好事例を紹介されるとともに今後の志を同じくする全国の首長等との連携にむけた宣言もなされる画期的なものとなった。

今回のフォーラムへは、地元福岡市をはじめ北海道(恵庭市)・岩手(盛岡市)・京都(亀岡市)・兵庫(塚本)・東京・愛知(名古屋・瀬戸)・豊明)等全国の仲間達が参集した(総参加者数:75名)。

9月9日(日)「花と緑のまちづくりフォーラム2018in福岡」:<メインフォーラム(九州大学箱崎キャンパス)/大名フォーラム:(フクオカ・グロース・ネクスト:旧大名小学校旧放送室(参加32名)/交流会AWA BAR(フクオカグロースネクスト内:参加15名)を開催

Iメイン・フォーラム(九州大学箱崎キャンパス 本部第一庁舎2F会議室:参加28名)

●基調講演 八木波奈子(ガーデニング誌『BISES』元編集

長)「花と緑のまちづくり〜コミュニティガーデン〜」

見附市の市民参加の花と緑のまちづくりの「健康増進(老人医療費年間10万円・人以上削減)、企業誘致等多様な効果を発揮しているユニークな取り組み、空家対策テンミリオンハウス(武蔵野市)、「被災地を花で再生<寄付59件、助成金17件>(石巻市雄勝)福岡市内民間住宅地開発における花緑重視の効果と花と緑のまちづくりの担い手としての市民たちの活躍・まちづくり事例等コミュニティガーデン成功事例紹介

●自治体トップの「花と緑のまちづくり」施策等紹介:

1. 亀岡市長桂川孝裕:自然と調和した潤いと安らぎのあるまちを目指し、花と緑が彩るまちづくりを推進。「亀岡市まるごとガーデン・ミュージアム構想」をはじめ、多様な取り組みを紹介。今後、全国の市民団体との議論を交わしながら、花と緑のまちづくり首長の会を立ち上げ、花と緑のまちづくりを推進していくことを提案
2. 盛岡市都市整備部長(谷藤市長代理) 船水義一: 荒廃したシカゴの都市内に花と緑を増やした結果、市民の意識が変わり、治安が良くなり、多くの観光客が訪れ、雇用の場も創出されるという好循環/姉妹都市ビクトリア市(カナダ)がハンギングバスケットの花が美しい居心地のいい空間を街中につくり世界中から多くの人々が訪れている事等を参考に、「花と緑のガーデン都市づくり事業」展開。市民、事業者、行政の協働による取り組み。

●「花と緑のまちづくり」先進地からの報告

1. 内倉真裕美 恵庭市では町内会、商店会、各団体行政が一体となり花と緑のまちづくりを積極的に行ってきた。市は2018年、今後10年間の花のまちづくりを目指す行動指針「えにわ花のまちづくりプラン」公開。これは市民・行政・団体・企業それぞれの立場で行動し「恵庭花のまちづくり推進会議」がプランの進捗管理と検証。
2. 福岡市の取り組み紹介・上原真之 福岡市による「一人一花運動」の取り組み紹介/古荘浩士 こども病院フラワーボランティア・九大病院・はなくらぶ30年等の取り組み紹介/石井康子(福岡市緑のコーディネーター)多様な活動紹介/きむらみえこ 花と子どもたちが主役フラワーアップ活動紹介(美しいまちづくり福岡)

●大会宣言(二件)

1. 花と緑のまちづくり全国首長会発起人代表 花と緑のまちづくり全国首長会発起人代表 亀岡市長桂川孝裕
2. JSURP花と緑のまちづくり・福岡宣言 日本都市計画協会花と緑のまちづくり推進フォーラム実行委員会 会長 井上忠佳 <参照:「ひらひら日本2018グリーンウイークス」のウェブサイト>
「Chelsea Fringe Festival」:ロンドンを拠点に世界中のコミュニティガーデニング等の取り組みを祝福する取り組みとの連携をはかっている<http://www.chelseafringe.com/>。

都市農地を活かすまちづくりの展望

一般財団法人 都市農地活用支援センター 小谷 俊哉

●はじめに

2015年の「都市農業振興基本法」の成立以降、毎年のように新たな都市農業・農地に関する制度改正等がなされてきた(2018年は、生産緑地を対象とした新法「都市農地の貸借の円滑化に関する法律」が6月20日成立、9月1日施行)。これで現在の生産緑地の約8割が指定後30年を迎え、買取申出が可能となる2022年を見据えた一連の制度改正等は一段落した(都市農地活用センターホームページのリンク一覧参照)。

- 趣旨：生産緑地は大半が三大都市圏特定市で指定されているが、今回は「地方都市」での活用可能性にもスポットを当ててセッションを開催した。
- プログラム構成：1.新都市農地制度の紹介(小谷)、2.制度改革の動向と今後の課題(水口)、3.貸借円滑化と農地活用の新たな局面(佐藤)、4.地方都市の現状と可能性(柴田)、5.質疑・意見交換。

水口 俊典(生産緑地研究会座長) 柴田 祐(熊本県立大学)
佐藤 啓二・小谷 俊哉(都市農地活用支援センター)

●セッションの概要(各報告者から)

1.新法(都市農地の貸借の円滑化法)の特徴：新法は都市農地の積極的な活用のため、農地法の手続きを経ないこと、法定更新がないこと(期限が来たら戻ってくる)等、ハードルの低さが特徴である。加えて、貸借しても納税猶予や農地並課税が適用されるように税制も連動している(但し、税制優遇は生産緑地指定後30年経過して特定生産緑地に移行しないものは適用外)。

2.新法の主な課題：新法の適用対象農地が生産緑地に限定されていることや都市住民には規模・期間等の制約が依然として残る。また、固定資産税が宅地並みかそれ以上の市街化区域内農地が存在しているが、生産緑地制度を導入していない地方都市の農家にとって新規に30年の営農義務を受入れるのは困難であること等。

3.新法の役割・新たな局面：生産緑地法の改正は「安定的な土地(農地)の確保」、新法「貸借の円滑化法」は、「農地のままでの利用」多様な主体で利用できるようにする「担い手の確保」の役割を担っている。今回の制度改正では地方都市でも特定市と同様に、できるだけ生産緑地制度を活用してほしいというもの。

4.地方都市の現状と可能性：生産緑地制度を導入している一般市(地方都市)は福岡・和歌山市等僅か10

都市。明石市(一般市)の生産緑地制度検討事例では、今回の一連の諸制度改正前の2013年頃、案を作成したが、同意が得られず導入を断念(案：対象外とする地区の設定(駅周辺や区画整理事業実施地区)、規模要件1000㎡以上)。また、田園住居地域の可能性について、明石市の場合、低層系住専地域の農地の多くが区画整理実施地区で対象外、残る農地は中高層系住専居地域にあるが、ダウンゾーニングを強いることになり、受け入れられにくい。

●質疑・意見交換

- 地方都市に適した緩和策：明石の調査では生産緑地としての規制を緩やかにする分、優遇措置も緩やかにする「第二生産緑地」を提案(環境が維持されていれば減免)。
- 研究会でも「緑農地区計画」という10年間の農地保全協定による生産緑地並税制特例を提言。
- 都市農地は立地適正化計画の居住誘導区域にも豊かな緑として入れてもよいのではないか。
- 生産緑地の導入対象地区として市民農園等、集落単位で良好な住環境をめざす地区を指定しては。
- 地方都市では、少し行けば調整区域にも農地がたくさん残っている。調整区域の農家から「不動産価値もある市街化農地が優遇されすぎている。都市農地を残す必要があるのか」という声もある。農政だけでなく都市的ニーズには都市側から税制措置を講じることも必要。
- 会場から一住民がスムーズに農地利用できて、指導も欲しい。／市街化区域農地が多く残っているが調整区域のインター付近の農家から市街化の要望があるが、まず、市街化区域内農地をどうするのか考える必要がある。／地方都市で生産緑地の話が広がらない理由は？→固定資産の低い都市部ではまだまだ問題にならない等。

●おわりに

今回は三大都市圏以外の福岡で意見交換が実現した。今後、地方都市も含め新しい制度活用の試みから得られる成果や課題を共有し検証していきたい。



プランナーの職能とAI

NPO 法人日本都市計画家協会理事 NPO 法人高度情報通信都市計画シンクタンク会議理事 守 茂昭
 一般財団法人都市防災研究所理事

平成30年9月9日(日) 15:00~17:00

旧工学部本館3階10番講義室

基本報告:

NPO 法人高度情報通信都市計画シンクタンク会議理事守真弓事務局長
 「最近のAI開発のトレンドについて」

パネルディスカッション:

東京大学小泉秀樹教授、(株)アビームコンサルタンツ江井仙佳氏、NPO 法人高度情報通信都市計画シンクタンク会議理事守茂昭

街づくりAI研究会を1年間運営し、AIの活用方法として避けた方が良い使い方、あるいは慎重に構えた方が良い使い方(例えば、個人の能力評価や意見調整のAI)について、比較的躊躇なく受発注が行われている姿があることが浮き彫りになったことが本企画の背景にある。



技術の盲目的発展から生まれる危機について、プランナーは警鐘を鳴らし注意を喚起する立場にあることを、協会内に呼び掛けてみたいと考えた。

ディスカッション

守: 江井氏は、少々質の悪いAIであっても、街づくりを進めるものであるなら何もないよりは良しとする、一方、守は、半端なAIで半端な進展を獲得するよりは何もない方が良い、という立場である。

小泉: 今ある技術の進化に絞って近未来を見るのであれば、AIを活用する人と活用しない人とが二分する可能性がある。AIは特定テーマに偏った分析であれば適切なアウトプットを出す。この偏った分析を活用するタイプの人と活用しないタイプの人が出るであろう。

江井: 自分はAIに多くの情報を読み込ませて何某かの判断をさせる業務が多い。ビッグデータを用いた場合の説得性は単なる情報収集より信頼性が高くなる。総合的判断でも素案やタタキ台を生み出す機能がAIにある。

守: 案ずべきは、タタキ台がブラッシュアップされずに、タタキ台のまま走り出す事態である。その場合、半端なタタキ台ならない方が良い、という判断がでてくる。

江井: 合意形成に至る前の準備作業が早くなること

を評価しさえすれば良いように思う。

守: タタキ台が大量に出てくる内に、合意形成の場までネグレクトされる可能性があるのでは。

小泉: 選択枝に関する数理的最適化は70年代で諦められたといえる。価値評価の分野が変わるたびに何が最適かがかわることが理由だった。現在、マスタープランの作成に関しては、各分野のステークホルダーの意見を集約していくのが主流である。その部分をAIが本当にやるのか疑問が残るのは確かである。

守: タタキ台が暴走する可能性について気にはなりません。

江井: それを恐れて技術開発を遅らせる必要はないと思う。然りながら、最適解を志向することの難しさがあり、個別最適解が多量に並ぶ所まではできるとしても、それを統合することは困難に感ずる。



守: 半端に質の良い判断がずらっと並んでその情報量が情報過多の状態を作ることになる。

江井: センサーは川面が危険水位に迫ることはわかっても、突破する瞬間を捉えにくい。プランナーの職能は変化し、職能を発揮すべき場面が変わる。

守: 情報過多の危険が迫ることについては、危険を察知することに我々存在価値を見出して良いのではないか。

江井: 救急関係でAIを用いる場合、病院の空きベッド数などの面で期待しないわけにはいかない。

フロア1: ドローンによる災害情報発信をAIでやろうとしているが、判定の経緯がブラックボックス化する。

フロア2: プランナーとしては、役所の求めに応じて個別データを出す、という程度の役割しか感じない。

小泉: 今、欧米のコンサルタントはシステムチックな防災システムの売り込みが激しい。

江井: データサイエンス的な視点はビジネスとして持つべきであろう。

守: システムコンサルタント間でブラックボックスの競い合いが始まっている。わかったようなわからない技術でお互いに競争しあっているといえる。プランナーは安全なブラックボックスと危険なブラックボックスを他の人にアナウンスできる存在でいたい。

全まち福岡の成果と意義

認定NPO日本都市計画家協会会長 小林 英嗣

1. 2018福岡：発掘と連携

全国まちづくり会議@北上(2014)は「復興のまちづくりを考える」、@東京(2015)は「都市の未来を考える」、@高岡(2016)は「伝統と創造のまちづくり」、@横浜は「まちづくりの新しい価値—多様性と交流から生まれるイノベーション—」、そして今年2018は福岡を舞台に「人と時のつながりが紡ぐ[まちの個性]」がメインテーマ。福岡での開催、しかもこの全国まちづくり会議2018の開催を最後にその姿を無くしてしまう伝統ある九州大学箱崎キャンパスを会場とすると決めたとき、頭を過ぎったことがある。

まず、来年2019は日本の近代都市計画を支えた都市計画法制定100年の節目の年。99年目のイブ年開催にあたり、次の世紀を垣間見ることが出来るような出来事やまち人との出会いへの期待感。2000年に亘り大陸や半島などとの交流・交易の伝統を通じてアジアを見据えた経済・文化・技術・人材の交流が展開されてきたゲートシティ博多・福岡を舞台に、九州人と全国から集まってくるまち人との熱い交流が、人材教育の拠点だった箱崎キャンパスで繰り広げられることへの期待。そして博多人・福岡人そして九州人の底力への期待である。

次いで、「若者の人口が多い」福岡圏。「挑戦に寛容な社会環境を持つ」福岡。「個性ある民間の力が大いに生きてきた」博多。そして工業都市を志向した総合計画を方向転換させ、民間主導・民間投資などで都市の基盤を形成してきた「民の覚悟と提言力、そして実行力」への期待である。

2. 全まちメニューのキーワード：「個性」、「新しい価値」、「覚悟と実行」、「賛と共感」

今回の全まちメニューには、メインディッシュは二つ。まず、オープニングの「関係をつくる」、「過去を深く吸い込み、未来を想う」、「活動や価値を生み出す仕組み」をキーワードにした基調講演(藤浩志氏

／秋田公立芸術大学・アーティスト)と福田忠昭氏が展開したパネルディスカッション(藤氏+臂氏+榎本氏)。二つ目は地元・尾辻氏が企画したもう一皿。梅本氏・川端氏・柴田氏・榎本氏の実務家による時代を横断した福岡都市デザインを紹介に加えて地元福岡支部の牧氏がファシリテートしたパネルディスカッションによるダイナミックで意味深い「福岡の都市デザインをレビューする」である。そして、二日間に亘る15のアラカルトディッシュは、国際フォーラムやポスターセッション、エクスカッションを含めての多様で刺激的、そして発見的・発掘的・発明的でワクワクする内容であった。

3. 再確認：自由な創造の場 JSURP

「合理性にもとづく大きな物語づくり」で総合的に都市や社会の未来を計画的に変えるという価値観による近代都市計画の限界が見えてきた現在、これからのまちづくりでは、「ミクロな課題解決の実践」、「小さな価値の発見・積み上げと伝播」によって地域社会の希望をつくり共感・共有し、そして地域社会のより大きな活動へと転換することが希



求されている。万人の合意より1人の「覚悟と実行」がキーであり、ミクロでエッジを効かせること、そして「賛と共感」の重要性。「共感」は距離を超え、地域社会を切り開くこと。そして1人が、10人が、100人が、1000人が、10000人が、「私有」を廃止し、関係性を築き、考えと行動を刺激しつつ「共生」をはかろうとする「相互扶助」の方向。加えて無頼・自由人・自遊人の集う「創造の場」— JSURP・v3—の姿を改めて透かし眺め、参加者が共有することができた「全国まちづくり会議2018@福岡」であったと思う。

4. JSURP創設25年は東京が舞台!

来年2019年は、日本都市計画家協会の創設25周年、都市計画法制定100年の節目である。

意味深いNEXT・FUKUOKAを期待したい。

全国まちづくり会議2019のご案内

全国まちづくり会議2019 実行委員長、芝浦工業大学教授 志村 秀明

2019年度の全国まちづくり会議は、巨大な開発が進む東京の江東・湾岸地域で開催しますが、これまでの全国まちづくり会議と同様に、各地で取り組まれている草の根まちづくりをテーマとしつつ、そのこれからの展開までを考えていきたいと思っています。

江東・湾岸地域のまちづくりでは、運河・河川・水辺の活用がまちづくりの大きなテーマになっています。東京都港湾局の「運河ルネサンスガイドライン」にもとづく「運河ルネサンス推進地区」に指定されている5地区の中で、江東区豊洲地区は、豊洲運河沿いの防災船着場から始まった活動が、豊洲5丁目にある通称「東電堀」へと展開し、「船カフェ」といったイベントや、アクセスディンギーといった水上のアクティビティが生まれています。また品川区の天王洲地区では、地元企業が中心となって、水辺の賑わいづくりと、多様な主体が連携するエリアマネジメントが進んでいます。河川区域でも川床の設置が進んでおり、江東区清澄白河の隅田川沿いには公共空間としての川床が民間企業によって設置され、週末は多くの人々が賑わっています。大横川沿いにも、深川の歴史・文化を再発信する川床事業が進んでいます。これら水辺の活用事例については、船舶をチャーターしてのクルーズ・エクスカッションを企画したいと思っていますのでご期待下さい。

江東・湾岸地域でもリノベーション・コンバージョンまちづくりは進んでいます。カフェのまちとして知られるようになった清澄白河以外に、江東区新木場でもコンバージョンが進んでいます。路地と長屋のまちと知られる中央区月島でもリノベーションやコンバージョンが進んでいます。品川区の旧東海道品川宿周辺地区でも、ゲストハウスなどのコンバージョンに加えて、様々な活動をまちづくり協議会が支える仕組みができています。

江東・湾岸地域では、2020年東京オリンピック・パラリンピック大会開催が間近となり、14競技会場と選手村の建設・準備が進んでいます。また2018年10月には豊洲市場もオープンしました。これらの巨大な開発を、レガシーというだけではなく、海上公園といった公共空間の活用をとまなう地に足がついたまちづくりにしていかなければなりません。そのような状況についても、可能であればエクスカッション

ンでご覧いただければとも思っています。

さて、来るまちづくり会議では、「地域づくり」をメインテーマに掲げて、まちづくりの展開を考えたいと思っています。生活圏を中心とするまちづくりは変わりなく重要ですが、地縁コミュニティが衰退していく今日では、広く生活圏の外にも目を向けて多様な主体の連携・協働によって、小さな取り組みを積み上げていくことで、まちや地域を改善していくという考え方が必要です。つまりここで言う「地域」は、生活圏や流域圏といった「圏域」ではありません。個々の活動による多元的な状態でありながら、無意識に全体性をもちつつ全体を構成する部分となっているネットワーク・コミュニティの集積を「地域」としています。ネットワークの範囲は、オープンな個々の取り組みからなるので、東京などの大都市部と地方がつながる、更に国境を越えてグローバルにもつながります。グローバルの強化がローカルの強化につながり、ローカルの強化がグローバルの強化につながる「グローバル」なまち・地域づくりを描き出したいのです。

大学と地域との連携は、全国的に活発になっています。江東・湾岸地域にキャンパスをもつ芝浦工業大学も積極的に地域連携を進めていますので、所属する研究者も、研究成果にもとづいていくつかのフォーラムを中心的に担当する予定です。大学は夏休み期間中ですが、多くの学生が参加する大会にもなればと思っています。

会場となる竹中工務店は、臨海部や内部河川エリアの水辺活性化や都市木質化などのまちづくりに注力されており、日頃からミズベリングプロジェクト（運河・河川・水辺の活用）、江東区のCIG (City in the Green) 事業などに主体的に活動されており、市民、NPO、大学、自治体と連携されています。

ぜひ多くの方々にご参加頂き、激動の江東・湾岸地

域を見ながら、今後のまちづくりの展開を考えていきたいと思ひます。宜しくお願ひ致します。



2018年6月1日～2018年10月31日
協会の動向

<2018年6月>
7日 第125回街なか研究会
9日 第161回理事会、第17回通常総会、シンポジウム
20日 ejob事業事務局会議
まちの縁側づくり連続セミナー①
26日 JSURPまちづくりカレッジ打合せ
27日 第126回街なか研究会
30日 JSURPまちづくりカレッジ札幌シンポジウム

<2018年7月>
4日 まちの縁側づくり連続セミナー②
5日 コミュニティデザイン普及事業
6日 連続セミナー19シリーズ①
11日 生産緑地研究会
12日 JSURP三役会議
13日 Jsカフェ
14日 コミュニティデザイン普及事業(まちビトトーク)
19日 ejob事業事務局会議
21日 仮設市街地研究会同窓会・納涼会
23日 全まち福岡実行委員会
26日 第162回理事会
27日 連続セミナー19シリーズ②
30日 震災復興支援タスクフォース
31日 連続セミナー19シリーズ③

<2018年8月>
1日 全まち2019キックオフ
6日 全まち福岡実行委員会
9日 JSURP後援事業
20日 JSURPまちづくりカレッジ
27日 ejob事業事務局会議、財務運営委員会
全まち福岡実行委員会、JSURPまちづくりカレッジ
30日 コミュニティデザイン普及事業

<2018年9月>
3日 震災復興支援タスクフォース
JSURPまちづくりカレッジ
5日 JSURPまちづくりカレッジ
7日 JSURPまちづくりカレッジ
8日 全国まちづくり会議2018in福岡
9日 全国まちづくり会議2018in福岡
第127回街なか研究会
10日 全国まちづくり会議2018in福岡エクスカッション
14日 JSURPまちづくりカレッジ
20日 仮設市街地研究会、JSURPまちづくりカレッジ
21日 第163回理事会
26日 生産緑地研究会、JSURPまちづくりカレッジ
28日 JSURPまちづくりカレッジ

<2018年10月>
1日 全まち福岡実行委員会、財務運営委員会
2日 JSURPまちづくりカレッジ
4日 ejob事業事務局会議
コモンズ型まちづくり研究会発起人会①
10日 シティラボ東京内覧会①
11日 第128回街なか研究会
12日 JSURPまちづくりカレッジ
15日 JSURPまちづくりカレッジ
18日 コモンズ型まちづくり研究会発起人会②
19日 JSURPまちづくりカレッジ
24日 JSURPまちづくりカレッジ
26日 JSURP三役会議
29日 クロストークセッション
30日 JSURPまちづくりカレッジ
31日 シティラボ東京内覧会②

2018年6月1日～2018年10月31日
会員の動向

★入会者名 13 (正2、賛助個人11)

正会員：村山顕人、中居浩二

賛助個人会員：望月健太、星野奈月、河津玲、
山中巧、平松宏城、五十嵐淳、
田中富朗、町井智彦、宮本裕美、
高畑千夏、介川亜紀



Japan Society of Urban and Regional Planners
認定NPO日本都市計画家協会

【Planners●都市計画家】2018年11月30日発行

編集● 認定NPO日本都市計画家協会 / Planners編集長：佐谷和江

【編集委員】内山征 小泉秀樹 今場雅規 園田聡 高鍋剛 田嶋麻美 中川智之

【交流・広報委員長】渡会清治 【北海道支部】近藤洋介 【静岡支部】海野芳幸

【横浜支部】田島泰 【福岡支部】牧敦司

制作● 認定NPO日本都市計画家協会 デザイン●スタジオガンボ

発行● 認定NPO日本都市計画家協会

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2丁目10番地 香取ビルアネックス2階
TEL 03-6273-7491 / FAX 03-6273-7492